平成7年度-

研 究 紀 要

-- 第2集--

熊本県立装飾古墳館

平成7年度

研 究 紀 要 — 第2集—

はじめに

本館の研究紀要は、平成4年度に第1集を刊行して以来、永らく途絶えていましたが、 今度第2集を刊行いたすことになりました。

今回の研究紀要では、当館初代館長であった原口長之先生が40数年前に調査された、馬塚古墳(県指定史跡)・臼塚古墳(市指定史跡)・辨慶ケ穴古墳(国指定史跡)の調査報告書をまとめて復刻することとしました。この三古墳は、菊池川流域の装飾古墳を特色付ける代表的な古墳でありますが、40数年前に調査されたことと、当時ガリ版刷りで百部前後の印刷であったため、現在では入手困難な希有の書となっており、研究者からもその復刻が望まれる報告書でありました。

これらの要望を満たし、県民の皆様に装飾古墳に関する貴重な資料を提供することは、 博物館法の第三条に準拠するまでもなく、装飾古墳館として当然実施すべき事業であろう と思われます。

戦後、皆が貧しかった当時、調査報告書をガリ版刷りとはいえ、プロの印刷所に依頼し 出版するに当たり、先生にはかなりの自費を負担されたやにも聞いております。

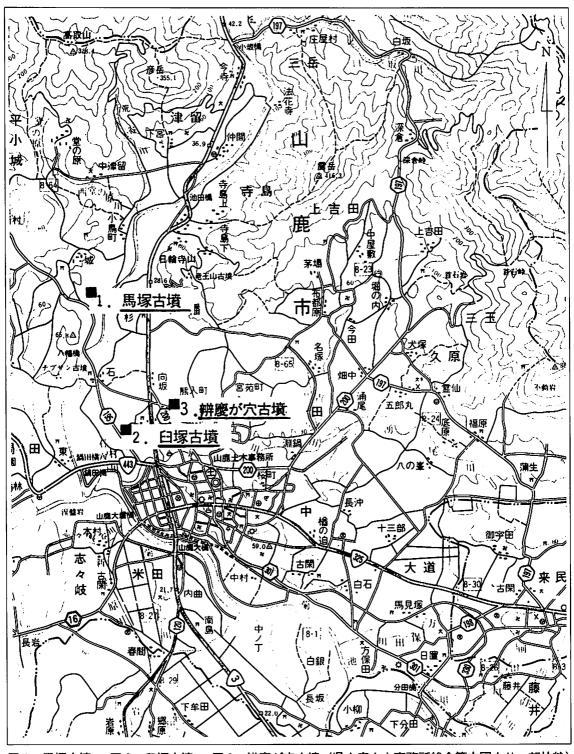
また、「機会があったら復刻を」との生前の先生の言葉もあり、この度御遺族のお許しを得て、この機会に、これら三報告書をまとめて研究紀要として、刊行いたすことにした次第です。

装飾古墳の研究者のみならず、郷土の貴重な文化財である装飾古墳を、県民の皆様に御 理解いただくためにも、ぜひ御活用いただきますようお願いいたします。

平成8年3月31日

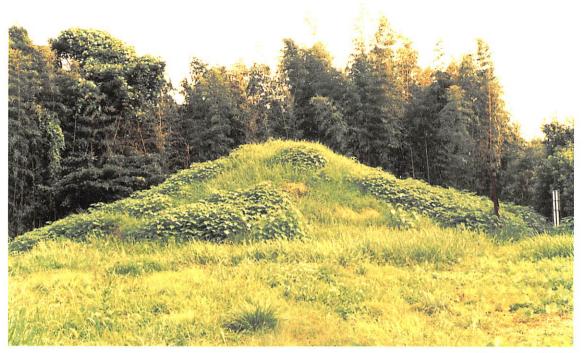
熊本県立装飾古墳館・館長 中 島 武 治

- 1. この研究紀要には、馬塚古墳(県指定史跡)・臼塚古墳(市指定史跡)・辨 慶ケ穴古墳(国指定史跡)の三報告書を調査年次順に収載した。全て、山鹿 市内に所在する装飾古墳である。なお辨慶ケ穴古墳は報告書出版当時は「辨 慶が穴」であったが、国指定時に「辨慶ケ穴」と告示された。本紀要では原 文どおり記載した。
- 2. ガリ版刷りのこれら三冊の報告は、当時、印刷部数が百部程度と僅少であったことと、残っている原本も40数年の歳月を経て、紙面は黄色く変色しているのが現況である。このため、貴重な装飾古墳に関する資料を後世に残し、県民及び研究者に活用していただく事を目的として、今回の復刻に踏み切ったものである。
- 3. この三報告書の原本で正誤表が添付されていた分については、今回の復刻時に訂正を施した。その他、明らかな誤字等もこれを訂正した。しかし、記述内容については一切手を加えなかった。
- 4. 三報告書のうち、馬塚古墳と辨慶ケ穴古墳については、巻末に実際のモノクロ写真を貼るための厚手の台紙が綴じ込まれ、説明文も付されていた。しかし、当時経費の都合で添付されていない報告書が大半だったため、この度、当時の遺跡・遺構のモノクロ写真を探し印刷時に挿入した。また不足分については、新しく撮り直し掲載した。
- 5. 本文中の挿入図については、基本的には本文の記載と適合するように配置 し、同縮尺となるように心掛けた。ただ、折り込み図面等については紙面の 都合もあり、縮尺を変えて本文中に挿入した箇所もある。
- 6. 挿入図面等については、当時原図から、印刷所の担当技術者が、鉄筆とヤスリ版を使ってガリ版上で起こしたものである。従って、現在のように滑らかな曲線となっておらずギクシャクとした部分もある。当書では、このガリ版刷りの図面をそのまま使用したが、御容赦いただきたい。
- 7. 自治体等の、公文書の版型等に見られる現在の趨勢は A 4 版であるが、報告書の原本が三冊とも B 5 版であるため、それを踏襲した。
- 8. 校正は正確を期すため、当時この三つの古墳の発掘調査に従事した隈昭志 氏(熊本県立荒尾養護学校長)、および桑原憲彰(熊本県立装飾古墳館副館長) がこれに当たった。

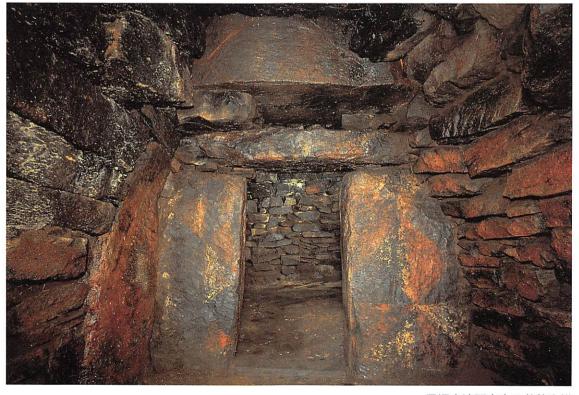


■1. 馬塚古墳 ■2. 臼塚古墳 ■3. 辨慶が穴古墳(県山鹿土木事務所総合管内図より一部抜粋)

[口絵1]



現·馬塚古墳墳丘



馬塚古墳石室内の装飾文様

[口絵2]



臼塚古墳墳丘

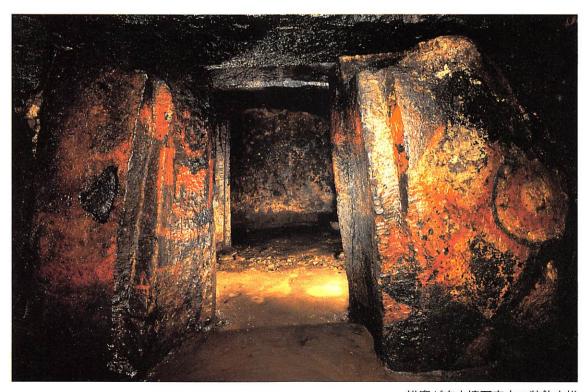


臼塚古墳の石屋形と装飾文様

[口絵3]



辨慶が穴古墳墳丘



辨慶が穴古墳石室内の装飾文様

研究紀要 総目次

馬塚古墳調査報告	C 祭祀遺物
◇ はじめに	D 縄文土器と石器
1. 調査の経過 4	写真目次
2. 遺跡 6	第1 馬塚古墳発掘調査風景(1)
①古墳の位置 6	第 2 馬塚古墳石室関係写真(2)
②墳 形 7	
③石 室 7	
3. 遺 物 8	臼塚古墳調査報告
①	◇はじめに
②服飾品 9	1. 調査の経過 30
③土 器 9	①発掘の準備 30
④祭祀遺物 9	②発掘の次第30
⑤縄文土器並に石器 10	2. 遺 跡 33
4.考察10	①古墳の位置 33
①古墳の内部構造 10	②立地々形
②古墳の外容 11	③墳 形34
③馬塚古墳の年代観 11	④石 室
④ 結 語 ······ 12	(1)玄 室
附録 (1)菊池川流域に於ける横穴石室墳一覧	(2)厨子型石棺と石枕 35
(2)馬塚古墳調査参加者名簿	(3)羨 門 36
揷図目次	(4)前 室 36
第1 山鹿盆地北部地形図	(5)装 飾 36
第2 馬塚古墳立地々形図	(6)構築状態 36
第3 墳形並石室配置図	3. 遺 物 37
第4 石室実測図	A. 武 器 37
①石室床平面図並に遺物位置	○鉄鏃 ○刀子 ○その他
②石室側壁図(東・西・北壁)	B. 馬 具 38
③石室断面図(玄室、前室、羨道、奥羨門、	○雲珠 ○杏葉 ○鉄環と銜 ○その他
中羨門)	C. 服 飾 品 39
第5 遺物実測図	○銅地金被せ鐶 ○水品匂玉 ○水晶管玉
A 鉄 器	○水晶切子玉 ○濃青色ガラス丸玉
B 土 器	○ガラス小玉 ○ガラス泡玉 ○銀環

○鍍具 ○鉤具	附錄 (2) 臼塚古墳調査参加者名簿
D. 容 器 40	写真目次
○頸付壷 ○横瓮 ○高坏 ○坏の蓋	第 1 臼塚古墳石室関係写真(1)
○坏 ○須恵器破片	第 2 臼塚古墳石室関係写真(2)
E. 石 人 ······ 40	
F. 埴 輪 ······· 40	
G. 貝 類 ······ 41	辨慶が穴古墳調査報告
H. 人 骨 ······ 41	1. 調査前の辨慶が穴古墳 79
4. 臼塚古墳の考察 坂本経尭 41	2. 調査の経過 79
①墳 形 41	①調査の動機 79
②石室の構造について 42	②調査の次第 79
③石室の装飾文様について 43	3. 遺跡 81
④副葬品について 44	①古墳の位置 81
⑤玄室の破壊状態について 46	②墳 形 81
⑥臼塚古墳の年代観 46	③石室 82
挿 図	4. 装飾文様 85
第 1 山鹿盆地北部地形図	①第2 羨門西袖石截り口の文様
第2 臼塚古墳立地々形図	②第2 羨門西袖石の文様
第3 臼塚古墳々形並石室位置図	③前室西側壁の文様
第4 石室実測図	④第1 羨門西袖石北面の文様
(1)石室床面平面図並遺物配置図	⑤第1 羨門東袖石北面の文様
(2)玄室側壁図	⑥前室東側壁文様
(3)前室側壁並断面図	⑦第2羨門東袖石南面の文様
第5 装飾文様	⑧第2羨門東袖石截り口の文様
(1)厨子型石棺内壁	5. 遺物 88
(2) 義門袖石	6. 考察 91
第6 遺物実測図	◇ おわりに93
(A)武器	附録 辨慶が穴古墳調査参加者名簿 94
(B)馬具	挿図
(C)服飾品	第 1 図 本報告書で使用する石室各部の呼称説明
(D)容器	第2図 厨子型石棺正面実測図
(E)埴輪	第3図 第2羨門実測図(南面)
(F)貝類	第4図 第1羨門実測図(北面)
(G)石人	第5図 装飾文様の存在する位置を示す図
附録 (1)肥後の釶集成 坂本経尭	第6図 第2幾門西袖石截り口文様

- 第7図 第2羨門西袖石文様
- 第8図 前室西側壁文様
- 第9図 第2 羨門西袖石北面文様
- 第10図 第1 羨門東袖石北面文様
- 第11図 前室東側壁文様
- 第12図 第2 羨門東袖石南面文様
- 第13図 第2 羨門東袖石截り口文様
- 第14図 遺物出土状況

図版

- 第1図 山鹿盆地北部地形図
- 第2図 辨慶が穴古墳立地地形図
- 第3図 辨慶が穴古墳々形並石室位置図
- 第4図 石 室 実 測 図
 - 1.床面図
 - 2. 南北断面図 (主軸にそって)
 - 3. 玄室東西断面図
 - 4. 前室東西断面図
 - 5. 東 側 壁 図
 - 6. 西 側 壁 図
- 第5図 主要遺物実測図

写真目次

- 第1 辨慶が穴古墳調査関係写真(1)
- 第2 辨慶が穴古墳装飾文様関係写真(2)

熊本県山鹿市大字城

馬塚古墳調査報告

原口長之

昭和30年6月

熊本県立山鹿高等学校考古学部山 鹿 市 役 所 観 光 課

はじめに

この地方は、報告書の中でも述べたように、菊池川流域における古代文化の一大集積地である。大正年間に鹿本中学校波多教諭によってチブサン古墳、鍋田横穴群、長岩横穴群等の調査報告があり、亦、京都大学梅原末治教授によって「肥後の装飾古墳」の中にも収録され学界に紹介されたが、爾余の大小二十数基の古墳については今尚未調査のままのこされてあった。

平素、微力ながら郷土の古代文化の解明を念じて来た本校考古学部は、たまたま馬塚古墳が破壊の厄に遭おうとしたのを契機として発掘調査を実施し、古代文化の姿相の一端を明らかにし得たことは、まことに嬉しい事であった。

殊に当事者として最も深いよろこびを禁じ得なかったのは、この調査によせられた学校 内外の絶大なる御好意であった。学校における諸活動は内にあっては学校長、同僚教職員 の理解、外にあっては地域社会の援助の如何にかかっていることは言う迄もない。考古学 のような地味な学究の仕事において特に然りである。山鹿高校長斉藤寿祐先生は殆ど連日、 発掘現場に来られ物心両面に亘って御援助頂いたし、直接の関連教科たる社会科担当教官 は勿論全校の先生方の暖かい御援助があった。

地域社会にあっては古閑一夫市長、吉田助役、直接文化事業の担当者として森川恒臣観 光課長さん、教育委員会から江上教育委員長、地元から松永平小城出張所長さん方の惜し みなき御助力を特記して感謝したい。

「調査の成果は遺跡そのものの状態によって価値づけられるものでなく、調査に当る人の 能力の総和によってなされるものである」(坂本経尭氏古閑原貝塚調査抄報より)が、この 調査に当って、不敏な私に対して与えられた坂本経尭委員の御指導に深謝申し上げたい。

この報告書に若し学界に寄与するものがあるとするならば、それは坂本委員の功績である。

最後に誠実に終始一貫、仕事に取り組んだ卒業生の隈昭志君、並に松本修一君を部長と する本校考古学部員に敬意を表する。

馬塚古墳調査報告

1. 調査の経過

(1)発掘の動機

昭和29年10月の初旬、山鹿市大字城の一村民から、馬塚古墳が最近、何者かによって新たに発掘されかかっているとの通報があった。

山鹿高校考古学部は早速、その真偽を確かめる ために現地に赴いて調査した結果、既に石室の一 部が露出し容易に盗掘される状態にあり、その上、 通報の如く一部分は破壊されて新たに掘返し始め た形跡もあることを確認し直ちにその旨を県に届 け出た。

10月26日、県から文化財専門委員坂本経堯氏が 現地調査に来られ山鹿市森川観光課長、山鹿市江 上教育委員長、山鹿高校教諭原口長之も調査に同 行した。

調査の結果、発掘の必要を認め山鹿高等学校長 斉藤寿祐が発掘責任者として発掘届を県に提出し た。

(2)発掘準備と発掘の次第

10月27日から原口長之は考古学部員と共に古墳 立地地形並びに墳形を実測し、その傍、土地所有 者との交渉、経費、用具等諸般の準備に当った。

● 第1日 12月3日 金曜 晴天

墓前に集合して古墳祭並びに鍬立の行事を執行 参列者

山鹿高等学校長斉藤寿祐、県文化財専門委員長 坂本経堯、山鹿市吉田助役、同森川観光課長、同 市江上平助教育委員長、山鹿高校中村力教諭、同 原口長之、同考古学部員、その他村民有志

斉藤校長による鍬立の行事が終って、斉藤、吉田、江上の各氏から挨拶や激励のことばが贈られ、 坂本委員から本調査の意義について説明があった。 10時45分発掘開始、封土の頂上中央に発掘原点を定め石室の露出部分から掘り始める。排土作業中、点々と須恵の杯、甕の破片を採取、但し埋没の状態は偶然的なもので墳墓祭に献供したものを打ち割って一括埋納したというような形跡は全く認められない。

午後、石室直上と予想される処に大きく喰いこんで作業の障害をなしていた楠の根株を全員必死の努力で撤去した。以後排土が順調に進捗し、15時過ぎ封土表下約1米20糎の深さに東西約3、5米、南北約4米の範囲に亘る大小7個の石頭を露出した。石頭の配列状態は中央やや南よりに約1平方米の板状石、その周辺に大小形状不定の7個の石群が不規則に存在、4周に恐らく側壁であろうと思われる板状石の小口を見る。

更に慎重な注意のもとに排土を進め17時、4周の側壁を確認し、南側にある、縦約2米50糎、約80糎のほぼ短形状をなす巨石は羨門の眉石である事が判明した。発掘前から石室は或いは崩壊埋没しているものと予想していたが、この時に至ってこの予想を確実にした。ただ落下している石材の量が少なくてこれだけでは天井を構成するのには石材量が不足するのに疑念をもつ。

● 第2日 12月4日 土曜 晴天

2 班に編成。昨日の作業によって羨門眉石の存在が確認されたのでこの石室の主軸の方向が大体において北東-南西の横穴式構造を有し南西に向かって開口していると推定し第1班は羨道の掘開に当たる。

第2班は昨日、露出した玄関の大小石群の配列 を平板測量に移し、各落下石の実測を行う。

17時30分、本日の作業を終了

● 第3日 12月5日 日曜 晴天 9時開始 第2班は玄室における落下石群の配列について のレベルが案外手間どり11時20分漸く終了。次に 落下石群を注意深い、大きな労力をもって取り除 き排土を続ける。17時過ぎ、側壁を完全に出し、 側壁の鮮やかな丹塗り、石の表面を平かに削りと とのえたよきの跡、使用石材がこの平小城台地で 現在も採石されつつある凝灰岩であること。玄室 の側壁は大きな1枚の板石を加工して根石にたて てその上に割石を小口積にしてあること。玄室の 平面形がほぼ正方形で東南角が隅丸となっている ことに気付かれた。

石室構造の全容が明瞭になったので本日この石 室計測基線を厳重に設定する(以下単に基線と称 する)

第2班採取遺物は下記

- (イ)基線下1米94糎、西南隅に須恵破片を発見、これをはじめとして深さ10糎内外にわたって 須恵の杯の蓋の破片など4ヶ採取。尚同一場 所に木炭屑を発見。
- (ロ)基線下2米25糎を中心としてその上下、東北 角一帯にかなくそ、鉄鏃残片、須恵、土師等 破片、特に鉄器残片の分布が濃厚。みな規律 ある状態ではない。
- (ハ発掘の途中、須恵、土師系切底、磁器片など 点々と存在する。更に注意せられた事は玄室 基線下2米35糎の西南隅に上部岩石の支柱の 役目をもった五輪塔の火輪、及び2米50糎下 に東壁に五輪塔の空、風輪、中央北寄りに全 じく五輪の空風輪が埋没していたので既に過 去における開口の疑いは決定的なものとなっ た。

第1班は12時、羨道の掘開を終る。その結果、 昨日までは羨道のみと予想されていたところに前 室があり中羨門が存在することに気付かれ、この 石室は南から羨道、中羨門、前室、奥羨門玄室の 構造もつ複室墳であることが判明した。羨道出口 は破壊されて全く痕跡を留めていない。

午後から荒尾第4中学校教諭三島格氏調査に参加、中義門における断面実測を指導し床面は上部から黒色土層、粘土層、礫層の層位を持つことを明らかにした。

発掘途中における第1班採取の遺物は次の通り である。

- (イ)基線下1米10糎、羨道西側南寄りに鉄鏃片を 発見
- (ハ)前室、東壁中義門袖石より80糎の深さに灯明 皿に使用したと想われる土師系糸切底、並び に全質の土師片、全じく西壁床面直上に糸切 底の土師坏、白磁片、土師坏片

第1部、第2部とも床面上10糎内外の堆土を残 し、明日の精密発掘を期して本日の作業を17時終 了。

● 第4日 12月6日 月曜 晴天

9 時作業開始、移植ゴテ、竹ベラを持って精密 発掘にかかる。

殆ど完全と言ってもよいほど内部は荒らされて おり遺物の配置も擾乱され尽して居ることに失望 する。殊に玄室東壁寄り奥羨門近くに恐らくは屋 根型石棺の屋根の残部であろうと思われる石片が 埋没していたこと。羨道端が全然破壊つくされ材 料も持ち去られていること。中羨門も上部眉石に 相当すべき石材がないことなどから見て、何のた めに石材を持ち出したものかと疑念をもたせる。

右の様な状態で、目ぼしい遺物もないが、

(イ)玄室北壁東寄りに主として鉄鏃片等の濃厚な 鉄製品片の残存がある。 (四玄室北壁東寄り床面直上から鉄鉾の身。柄木を受ける石づきの袋の部分

(*)玄室中央北壁寄りに刀身の造込に全然、鎬を 持たない所謂平造の直刀の刀身の一部

(二)玄室東壁南寄りに孔銭、弘治通宝の文字がある。この銭がこの地方に流通して居た頃、玄室の一部が開口し信仰の対象となり、この銭が賽銭として投ぜられたものであろう。仝一性格を有するものとして土師系糸切底の明らかに灯明皿に使用した盤破片数個分

は恐らくは室町頃の白磁、青磁片

(へ)前室東壁近く床面から殻粒文押型文、綾杉文 押型文の縄文式土器片

17時作業中止。三島格教諭本日午後帰荒

● 12月7日 火曜 晴天

9時開始。昨日に引続き前室、玄室の2班に分かれて精密発掘。

奥羨門前面西壁寄りから金銅製尾錠。

午後、発掘を終了して羨道、前室、玄室の床面 図並びに遺物配置図、側壁の部分精密実測図を作 製。

薄暮作業を中止し石室前に全員集合。坂本委員 の懇篤な挨拶、原口より諸注意を行い墓前に敬虔 な祈りをささげ調査を終る。

全日夜、斉藤寿祐校長、江上山鹿教育委員長、森川観光課長、池田経済部長、原口、他関係者集合、坂本委員の意見により、本古墳は一応、現状のまま保存し適当な保護施設を行い、社会教育の一助にもし、山鹿市観光ルートの一環ともすること、出土品は山鹿高等学校において保管することを協議決定した。

2. 遺跡

①古墳の位置 (第1・第2図)

位置 熊本県山鹿市大字鬼天神1328番地

(全市大字津留 古江利三氏所有・畑地) 立地状態 地理調査所の5万分の1地形図山鹿図 幅についていえば図幅の東端より14.5糎、南端よ り8糎の点に当り山鹿温泉の西北2400米、標高40 米、平野面との比高20米の平小城台地の南端に立 地する。

岩野川、内田川、木野川、迫川、合志川の5大支流をあつめて西流する菊池川によって掌をひろげた形に開拓された面積76平方粁の限府山鹿盆地の北線を限る1つの台地がこの古墳の立地する平小城台地である。この台地は後に西岳、彦岳、震岳、三尾山、中岳の標高400万至300米の山塊群を背負い、それらの山塊群の余波が徐々に高度を減じながら疑灰岩の断崖をもって岩野川に臨んでいる。海抜1000米、福岡、熊本の両県境に屹立する国見岳に発漂し西岳と東岳の両山塊の間に所謂岳間峡谷を刻んで来た岩野川が馬塚古塚の脚下に到ると割然と限界が開けた想いで大きくメアンダーしてこの台地の脚を洗っていく。

塚の上に立って東西の方をのぞむと肥後国誌に 言う往昔の茂賀の浦3000町の沃野が一望のもとに 展開して古代貴族ならずとも墳墓築造の地として さぞかし快哉であろうと思われる景観である。

この古墳周辺における古代文化を概観すると、 平小城台地上に、弥生中期須玖式の川辺小学校塾 棺群、梅原教授の肥後の装飾古墳で有名になった 前方後円のチブサン古墳、円墳オブサン、この台 地が岩野川の低地に接する凝灰岩の断崖には岩壁 の彫刻で知られる鍋田横穴群、付城横穴群、小鳥 町横穴群が百穴の景観を呈している。前方の平野 部には石人を伴える臼塚古墳、金屋塚古墳、岩野 川低地を隔てた東方日輸寺台地には、前方後円の 辨慶が穴古墳、倉塚古墳、御霊塚古墳、乳母塚古 墳が点在する。

この他、山鹿盆地周辺に点在する大小の古墳群

は絢爛たる古代文化の姿相を伝え、曽て菊池川下 流玉杵名湾一帯に開花した文化が菊池川を遡って 此処に一つの足溜りを形成したものとして注目さ れる。

②墳形 (第3図)

周辺の畑から削りとられ封土の西側半分は失われ石室の西側壁が露出して居るが残存封土と石室の位置から復元すれば径約25米—30米 高さ約4米の円墳が得られる。明治初年の土地台帳によればこの古墳の存在する畑全部が墓地となっているということからすれば西北に主軸をもった前方後円墳が立地する地域を有することとなるが現在は立証出来ない。円墳と見るべきである。

③石室 (第4図 ①②③)

南西に開口する横口式複室墳で羨道、中羨門、 前室、奥羨門、玄室に区分され石材としては凝灰 岩を使用している。

方向

一北東一南西の方向を有し南西に開口する **主軸**

基底部に於て奥壁より羨門側壁南端まで7.11米 玄室

玄室奥壁の幅は主軸上奥壁より0.34米の断面で 3.20米 奥行は主軸上で3.40米で床面図は正方形を基本形とするけれども相当いびつになっていて 奥壁の角は隅丸となっている (第4図①) 東壁と 西壁は上面を削平した厚い長方形の巨石を横たえその周囲から北壁に亘っては不規則な板状石を小口積にしている。一面に丹が塗彩せられ鮮やかな 色調を呈している。

天井部は奥羨門 眉石を残す外、全部崩壊していたが残存積石は持送り式丸天井の構造を示している(第4図②)

奥壁より1.10米の点に東壁と直交して仕切りの 障壁の残部があること、及び屋根型棺蓋破片が残 存したこと(第4図①)から見るとコ字形床と奥 正面には屋根型棺蓋を有した石棺が安置せられた ものと考えられる。

石室床は立地基盤たる台地の自然土層の赤土を たたきならしたもので敷石床、粘土床等の特殊工 作の跡は認められない。

奥羡門 (第4図③)

東袖石は幅1米、高さ1.43米、厚さ0.33米 西袖石は幅1.17米、高さ1.38米、厚さ0.30米 共に縦に立ててその中間に0.88米の羨道をつく り下に敷居石をおく

この両袖石に厚さ0.20米、長さ2.6米の長方形の石をわたし、更にその両端に約0.22米の高さに石を積み眉石を受けさせ、一見、神社の鳥居を連想させる。眉石は幅:凡そ0.45米、長さ2.85米に及ぶ長方形に近い巨大なもので本古墳に威容をそえている。

前室

奥行1.5米、幅は主軸上、奥羨門より.028米の線上で2.8米、形状は長方形に近いが非常に歪になっている。(第4図(1))

両壁とも板状石の小口積みで、而もその手法は 粗雑である。(第4図②)

南側に中羨門が開く。

中羨門(第4図③)

東袖石は幅、0.66米 高さ0.91米 厚さ0.24米 の長方形状の石を据え、これに厚さ0.16米 幅0.4 米 高さ1.11米の長方形状の石をたてかけるようにして2本並び立てている。補強のためであろうと思われる。

西袖石は幅0.66米 高さ1.20米 厚さ0.45米で、 東西の両袖石の間に0.81米の羨道を通ずる。

この袖石はローム層中約0.30米も深く掘り据え、中に蓋石をはめこむ切込みを刻出した敷居石が設けられている。

眉石はなく天井部も崩壊しているので状況は不 明である。

羨道

道幅、1.71米 中 表門より側壁南端まで2.2米あり(第4図①) 東壁は板状石の小口積で、手法は粗雑である。(第4図②) 西壁は全様の手法をとっているが、殆ど原型を失っている。 義門出口の状態は明瞭でない。

構築状態

石室側壁の構築、特に玄室側壁の構築に当って、 不規則な板状石の小口積と1枚板石状の巨石使用 法とを混用している処に本古墳石室の構築の特徴 がある。(第4図②) 亦、副葬品の状態から見れば 凝灰岩の切石的加工が不可能ではなかった筈であ り、現に東西両壁の1枚板状の巨石にははっきり と削平の跡がうかがえるのにも拘わらず、小口積 に使用せる板状石には加工のあとがあまり見受け られず自然に近い状態において使用されているこ とにも注意されなければならない。

要約すれば、

山鹿盆地にのぞむ平小城台地の突端、景勝の地をトとして石室床を作り、この地方に豊かに得られる凝灰岩を以て羨道、中羨門、前室、奥羨門、玄室と二重複室横口式石室を構築したものである。特に眉石の壮大さは印象的である。

玄室はこの台地の表層をそのまま生かして叩きかため前室も同じ方法をとる。玄室には正面には棺台を設けコ字形に仕切り石を以て区画しチブサン古墳にみるような屋根形の石棺を安置し側壁には鮮やかに丹塗りが施された。天井は板状石を小口積として順次持送り式に天井を作り封土をもって被覆した。封土は径20米—30米もあろうという円墳で遥かに衆人の仰ぎみるところであったと思われる。

3. 遺物

①武器 (第5図 (A) 鉄器(1))

遺物は

- A. 斂葬時の副葬品 B. 後世の祭祀遺品
 - C、縄文土器石器
- の3種に分類することができる。

A. 斂葬時の副葬品を更に (1) 武器 (2) 服飾品 (3) 土器 とする。

武器には鉾と刀と刀子と鏃があり主として玄室 奥壁に近く特に東北隅に濃厚に出土した。

○鉾(仝図(1))

1 ケ体に相当する破片がある。鉾身の断面は中 空菱形。内側に木質の附着がある。

○刀 (仝図(2))

直刀の刀身、断面図は三角形、幅2.5糎、背部の厚さ0.9糎、断面に遊離部があり鍛刀の際、鉄板を折り曲げて鍛えた状態がうかがわれる。木質の附着が認められる。

○刀子 (仝図(3)(4)(5)(6))

刀尖、2((4)(6)) 柄部1((5)) 完形1((3)) 完形刀子は長さ9.1糎、中央部の身幅1.3糎 腐蝕のため明瞭ではないが、身は庵棟をなしている。前室奥美門西壁際から金銅鍍金尾錠と近接して出土した。柄に糸を巻いたあとが認められ、別項鉄鏃の柄に糸巻一竹柄一桜皮巻の痕跡が認められるのと一連の関係を示し当時の拵の状態が推察される。

○鉄鏃 (仝図(1)—(20))

全部有茎式である。

身幅が著しく広く肉がうすく鎬のない、祭祀用 として使用されたと思われる所謂儀器に属するも の((8)(9)(10)(11)(12)) と身幅が比較的狭いもの((13)(14)) 肉の厚いもの((7)(15)(16)(17)(18)(19)(20)(21)(22)) などの実用 鏃に分ける事ができる。

このうち、(19)は身の著しく細長く断面が正方形

に近く肉の厚い所謂尖根式に属する鏃であるが、その柄部に糸を緻密に巻きつけた後が認められ、全様な形式を有する(20)には糸を巻いた上に竹柄をつけたあとがある。また(21)には糸巻をした上に竹の柄をつけ、その上を更に桜の皮で巻いた痕跡があり、当時のこの地方における拵の1方法が推察される。

○その他

用途不明の鉄片が16ある。その形状によって(2) (24の2つの形式に分類出来る。

主として玄室壁よりに採取。外に鉄滓一(四)がある。気泡が多い。

②服飾品 (第5図(A)(28))

○金銅鍍金尾錠

前室奥羨門西壁より(写真図版第5)出土。長さ4.6糎、留金の環部の直径1.9糎の弓状の反りを持った小さなもので末端はかぎ状をなしている。 実測図で淡彩の部分に鍍金が残存しその他の部分は鍍金は剝落して緑青をふいている。服飾品としてはこれが唯一のもので玻璃小玉1つだに出土しなかった。

○鉄環 (第5図(A)(26))

服飾品の中に入れることが適当かどうか不明であるが、一応ここにあげる。外径3糎、内径1.5糎、断面は円形の環で前室東壁羨門よりに出土した。 ③土器

土師系と須恵器にわけられるが、これらがこの 古墳の築造当時に直結するものと明瞭に認定され るものはない。併し土師、須恵共に編年が未だ明 瞭にされていない現在、一応本項にかかげること にした。

土師系土器は胎土良く汲水性が大きい。色調は 赤褐色で一般に平滑な感触がある。何れも糸切底 で実測図にはそれらのうちの代表的なものを(1)(2) (3)としてあげた。(3)には口縁部に煤が附着し耳、 口縁部の一部に灯芯の火口をおいたと思われる缺如があり、明かにい灯明皿として使用されたものである。

須恵器は破片ばかりである。この中、口縁部の 破片が2個あるのでそれを図に示した。(第5図B 須恵(1)(2))

(1)は坩で美しい青色を呈している。表面にはロクロのあとが見えるけれども一般に表面は粗雑である。同時に発見せられた多くの破片には内面に青海波文のたたき目があるがこの坩の内面は叩き目がなく凹凸が著しく整調のあとが見られない。胎土に細砂の混入がある。

(2)は蓋坏の身で口縁部がやや外に反って底部は やや上げ底になる。無文、灰黝色で肉の厚みも不 同、手法は粗雑である。

(3)(4)(5)に須恵の破片に見られる文様の3種をあげた。色は青色あり灰黝色あり濃淡とりどりで色調と文様との規則的関係はない。

④祭祀遺物 (第5図 (C))

この古墳が開口してから或る期間にわたって地 方庶人の信仰礼拝の対象となっていたことを物語 る遺物として次のものがある。

○弘治通宝 (第5図(C)の(1))

弘治という年号は明の孝宗の世、西紀1488年に始まり1506年に終る年号で我国の室町時代の末期に当る。本古墳の開口当時、賽銭として投ぜられたもので玄室東壁南隅より出土した。

○ 青磁片 3 (第5図 (C)(2))

復元すれば口縁直径16糎の盌となる。

黄色がかった青色をしていて所謂ひび焼の手法 をもつ。坂本氏は中世末期のものであろうと言わ れる。

○白磁片 1 (第5図 (C)(3))

細片となっていたが接合した結果、実測図のような器形を得た。坂本氏によれば青磁片と仝時代

のものである。無文、白色、底部に釉薬を欠いで いる。

⑤縄文土器並に石器

この場所に馬塚古墳が築造される以前に如何な る文化が発達していたかを示すものとして次の遺 物が出土した。

○打製石鏃 2 ((1))

石室床面下より出土。黒耀石。無茎の逆刺式に 属する。打調に無駄がなく熟練した手法を有して いる。亦、他の1つは排土中より検出したが燧石 製 形式は前記と全様である。

○押型文土器片

穀粒文二((2)) 綾杉文三((3))

共に厚手で胎土には正長石、石英の細粒を混入している。穀粒文押型は焼成が不十分で肉の中心部が暗黒色を呈している。綾杉文は焼成は十分であるが、粗雑な感じが強い。この中の1個は、心土に表皮をはり合わせて肉を作ってあり、その2重に重ねてある合せ目が歴然としている。共に床面下又は封土中より採取したもので古墳立地以前に、早くもこの場所に縄文早期の文化が存在していたことを物語るものである。

4. 考察

坂本経尭

①古墳の内部構造

魏志倭人伝には「棺ありて槨なし土を封じて家をつくる」とあって AD3世紀頃の日本墳墓の状態を述べている。弥生式時代甕棺、箱式石棺も槨のないものではあるが目立った封土の存在は不明である。津袋平塚、田底米塚では円い封土の上に船型石棺が露出している。この種の石棺は菊池川流域に20数例の発見があり4形式に分類される。このような集団性と形式の多様性とは後期の相ではなく船型石棺としてその形式統一に先だつもの

であって、前期古墳に比定してよい。玉名郡睦合院塚は前期の前方後円墳で後円部に形式差ある3ケの船型石棺が並列しその1ケは箱式の棺槨があり舶戦神獣鏡、ヒスイ勾玉、碧玉管玉、棗玉、玻璃小玉、剣、刀など古式墳に相当する副葬品があり相対年代はAD4世紀に入る古墳である。船型石棺は独木舟状の船型木棺を阿蘇系凝灰岩をもって刳抜いだもので棺をおさめる墓槨を存せず直接丘陵端に埋め土を封じて冢をつくったもので露出したものが多い。3世紀の墳墓とする確証はないが菊池川流域古墳の前期のものである。

家型石棺は板状石を箱形に組合せた棺身に屋根 形に刳抜いだ蓋をかむせたもので泗水村久米若宮 では3段築の円封土に直接埋められ、仿製方格規 矩鏡、剣、鏃、馬具、須恵等が副葬され、西合志 村生坪、石立では三角文の彫刻をもった小形の赤 い家型石棺内に小女人骨1体と漆塗の櫛1ケがあ った。泗水村住吉長塚、仝高江出分塚山も家型石 棺らしく菊池川本流域では月瀬、溝上に1ケあり、 大道、方保田ハヤマ塚もそれらしい。江田、船山 は横口ある大形家型石棺で副葬大刀銀象嵌銘文に よってほぼ5世紀の後半に比定されるが、横口と 羨道の複合がみられるので横穴石室の意図が織り 込まれたもので、入口のない合志川流域の若宮の 如きはその以前に置かるべきであろう。

横穴石室は棺をおさめる槨として築かれたもので漢式墳に系統づけられる。さきに述べた津袋平塚船型石棺に並び存する朱塚は安山岩板石を小割りにして煉瓦積みに長方形の槨を築き蓋石を架した竪穴石室状であるが横口に義門が設けられているという特異な石室で現在のところ類型を求めがたい。飽託郡小島町千金甲乙墳は安山岩板石の小口積みの横穴石室で長い義道の奥に隅丸矩形丸天井の玄室がある。奥正面に三方を盤状石で囲み巨石を蓋としてた所謂支石墓系の棺槨がある。即ち

支石墓を蓋うに漢式墳の横穴石室をもってしたも のである。玄室正面の棺槨に加えて障壁をもって 箱形の埋葬床を設けたものに能本市稲荷山があり 更に前室を附加し正面棺槨が厨子形となったもの に前方後円墳では山鹿市チブサン円墳では隈府町 袈裟尾髙塚がある。馬塚はこれに類型して正面に は彫刻ある家型石棺か或は厨子型棺槨を安置し障 壁による区画は奥正面の右側だけに残っているが コ字型の床が作られていたとして不都合ではない。 江田、穴観音はこのような石室を切石をもって築 造した堅固豪壮なもので羨門外は只字型に外開き となっている。丘陵端を利用して側壁をたてたも ので石室の長大に比較して封土は低く小さい。山 鹿市オプサンはこの式で前室のないものである。 即ち外開きとなった羨門部が玄室につらなるもの で玉名、永安寺西もこの式である。鍋田、城など の横穴古墳はこのような只字型の墓拡を岩崖に刳 抜いだものである。

船型石棺の蓋が屋根形に棺身が箱形に発達すれば家型石棺となり、家型石棺に横穴石室の意図が複合すれば江田、船山の横口式家型石棺となる。 又横穴石室に家型石棺が複合すればチブサンの厨子型棺槨となるであろう。この厨子型棺槨が岩壁に穿たれ厨子の軒に鐙瓦が刻出したものが石貫穴観音横穴古墳である。大化改新による中央集権の強化と薄葬令による政治的圧力は厚葬の風をおさえ墳墓によせたあこがれは、やがて寺院文化に転身していった。

②古墳の外容

弥生式時代墳墓のうち支石墓はその巨石を地表に露して偉容を示していた。社会組織の強化につれて統率者の身分が強大となり、その墳墓は壮大な外容を誇るに至った。棺や槨室を蓋う封土が円形に盛りあげられることは自然なすがたで、これを円墳とよび外容の主流をなすことは当然であろ

う。長大な竪穴石室を内部構造とする古式の円墳は頂に広い平な部分を生じて所謂截頭円錐形を呈し径に比して高さが低い。この種の墳形は菊池川流域では見出されえない。似たものに荒尾市野原がある。低い截頭円墳であるが低い側壁だけの墓室で石築の天井のない晩期のものである。家型石棺をもった円墳は截頭円形ではあるが高く隆然たる墳容を示しているものが多い。横穴石室でも、その前期のものは袈裟尾高塚、城、馬塚のように高い墳形をもつのは当然であろう。

前方後円墳は大和地方に発顕し大和朝廷による全国統一の進むにつれて地方にも営造されるに至ったものというのが定説である。円墳の一側に四角形の祭壇を附設した帆立貝式が最古の形で江田、船山のように前方部が長くのびた柄鏡式も墳形として古式に入るものである。米野岳岩原双子塚は3つの大円墳を従えた大前方後円墳で偉容誠に壮大であるが前方部は祭壇の意義を脱して幅広く且つ高まっている。所謂盛行期のもので5世紀を出でないであろう。山鹿市チブサンは前方部の幅は広く高さは後円部に比肩し後期の示相を呈する。厨子型棺槨をもった横穴石室や石人の樹立するなど後期の相顕著であって、6世紀に比定することは当を得たものである。

③馬塚古墳の年代観

横穴石室の一側が既に露出していたので封土の 大半を失っている。明治初年の地籍図には周囲が 墓地となっており畑地の形は西北に長くのびて前 方後円墳の立地する余地が認められるが確証はない。東南に開口する横穴石室は羨道 前室 玄室 に区分され前後の羨門部は両袖石の間に敷居石を 張り巨大な眉石を架した堅固なものである。玄室 には障壁と屋根形棺蓋の残片があったことによっ て隅丸矩形の玄室正面には家型石棺若しくは厨子 型の槨が設けられていたことが窺える。側壁や天 井石は附近に多い凝灰岩の切出岩を用いのみ痕歴 然たるものがある。天井も同じ切出石を積送りに せばめた丸天井であったらしい。装飾文様は認め られぬが内壁は丹を塗った赤い石室である。要す るに横穴石室の盛行期の示相を呈する。近くのチ ブサン石室に近似しオブサンの切石組の只字型横 穴石室とは明確に区分されるものである。副葬品 の残欠中の鉄鉾は江田、船山につながり、太型の 威儀鉄鏃は横穴古墳に少なくない。鏡の副葬はな いにしても耳飾や玉類の1個だに検出しなかった ことは異常であるが金銅製の尾錠は華やかな副葬 品の一端を物語るものである。

要するにその総合的な示相は鉾の如く中期の副 葬品をとどめているが、鏃の如きは後期副葬のも のと類型を、同じくして、石室の示相と相応して 後期に比定されるが切石組み只字型石室の発顕す る後晩期に、降るものではない。チブサンに比肩 し、オブサンに先立ち6世紀の中葉に比定して大 過あるまい。

④結語

菊池川流域における莫大な古墳のうち横穴石室

附録第1

菊池川流域に於ける横穴石室墳一覧

を内部構造とするものは前方後円墳5基円墳18基が確認されているが副葬品の検出されたものは限府町袈裟尾高塚だけであってその年代を比定することが困難であった。馬塚の調査によって横穴石室盛行期の1墳と副葬品の一部が検出されたことは、記録に値する。平小城台地という1地区内に於ける前方後円墳、円墳、横穴古墳という様式を異にする古墳群は年代を追って営造されたものであり、その編年は類型を他と比較することによって考え得ないことでもなかったが馬塚の調査はそうした大切な問題解決への有力な資料を見出したことは、この調査の意義を高からしむるものである。

馬塚古墳の調査は熊本県立山鹿高等学校長斉藤 寿祐氏責任の下に同校原口長之教諭を中心とする 考古学部員が担当し山鹿市、同教育委員会の積極 的な支援のもとに成功した。この調査に立会った 熊本県文化財専門委員として慶祝の意を表してこ の概説を終ろう。

(昭和30年5月)

昭和30年6月現在 **坂本 経尭 原 原 原 長 之**

番号	名 称	所在地	封 土	類型	石室特徵	副葬品	文献・報告者	備考
1	高道・辨財天	玉名郡岱南 村高道	円 墳	A	天井部は板葺 状に葺き窓あ る家型石棺	直刀 1 他不明	田 <u>逸</u> 哲夫辨財 天古墳の研究	
2	玉名市、繁根木	玉名市繁根 木八幡の背 後デンザ山	円 墳	В	円を塗る模式	短甲、刀、 環頭大刀、 鉾、貝輪	熊史調第2冊	封土中に 家型石棺 あり
3	玉名市、大坊	玉名市玉名 大坊	円 墳	D	装飾古墳	不明	装飾ある古墳 の研究、熊史 調4	

番号	名 称	所在地	封	土	類型	石室特徵	副葬品	文献・報告者	備考
4	玉名市永安寺東	玉名市玉名 永安寺	円	墳	D	装飾古墳、模 式墳		右全	
5	玉名市永安寺西	玉名市玉名 永安寺	円	墳	E	装飾古墳、模式		右仝	
6	江田、塚坊主	玉名郡菊水 町江田清原	前方征	後 円	В	厨子型棺槨		梅原末治博士 調査	
7	江田、穴観音	玉名郡菊水 町江田中小 路	円	墳	C	模式		右概要	
8	山鹿市チブサン 、	山鹿市城西 福寺	前方征	发 円	В	装飾、厨子型、 棺槨		熊史調第2冊	石人、埴 輪円筒
9	山鹿市オブサン	山鹿市城	円	墳	E	模式		鹿本郡誌	
10	山鹿市弁慶が穴	山鹿市熊入	円	墳	В	丹で円、動物 を描くという		熊史調概要	
11	山鹿市臼塚	山鹿市石	前方名	後 円		後円部羨門眉 石らしいもの 露出		熊史調第2冊	石人、埴 輪円筒
12	山鹿市馬塚	山鹿市城鬼 天神	円	墳	В	丹彩	刀、鉄鉾、 鏃、刀子、 金銅尾錠、 土師、須恵	原口長之	
13	山鹿市御霊塚	山鹿市名塚	円	墳	D			鹿本郡誌 原 口長之	
14	広・二た塚	鹿本郡鹿央 村広	円	墳	Е			鹿本郡誌 原 口長之	
15	津袋御霊塚	鹿本郡鹿本 町津袋	円	墳	D			原口長之	
16	津袋朱塚	右仝	円	墳		竪穴式石室に 羨門あり丹彩		坂本経尭	
17	袈裟尾髙塚	菊池郡隈府 町袈裟尾	円	墳	В	線刻装飾丹彩	勾玉、金環、 帯金具、鏃 刀、馬具、 須恵、土師	熊史調概要 坂本経尭	
18	仝 臼塚	右仝	円	墳		石室用石露出		坂本経尭	
19	赤星ヤンポシ塚	菊池郡戸崎 村赤星	円	墳		羨門開口		坂本経尭	

番号	名 称	所在地	封 土	類型	石室特徴	副葬品	文献・報告者	備考
20	木柑子フタ塚	菊池郡花房 村木柑子	前方後円		石室用石		熊史調第2冊	石人
21	蛇塚	菊池郡七城 村蛇塚	前方後円		後円部に羨門 眉石露出		菊池郡誌 坂本経尭	埴輪円筒、 前方部に 箱式石棺
22	小野、鬼の窟	鹿本郡山東 村小野	円 墳	В	厨子型棺槨		鹿本郡誌 坂本経尭	棺複合
23	石川山	鹿本郡山東 村石川山	円 墳		崩れた積石石 室		坂本経尭	2基
24	泗水、福本	菊池郡泗水 村福本	円 墳		崩れた巨石		坂本経尭	3基
25	住吉、狐塚	菊池郡泗水 村北住吉	円 墳		大きな 羨門 眉 石		坂本経尭	
26	髙柳、北受	菊池郡北合 志村高柳	円 墳	E	積石単室只字 型羨門		坂本経尭	
27	城北黄金塚	鹿本郡菊鹿 村鐘掛松	円 墳		板石小口積単 室		坂本経尭	

B類 割石小口積、複室、丸天井、棺槨

C類 切石積、複室、屋根形天井、棺槨

類 D類 切石積、単室、屋根形天井、羨門部只字型に開き棺槨あるもの

E類 D類石室にして棺槨なきもの

附録第2

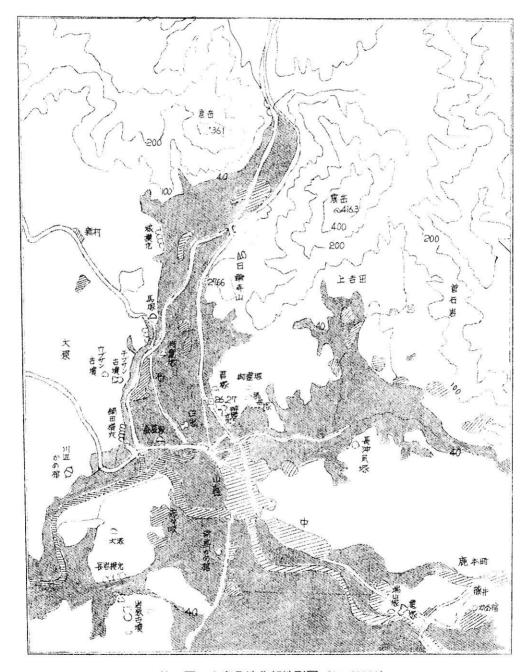
馬塚古墳調査参加者名簿

- 1. 発 掘 者 熊本県立山鹿高等学校長 斉藤寿祐
- 2. 発掘担当者 熊本県立山鹿高等学校教諭 原口長之
- 3. 発掘立会者 熊本県文化財専門委員 坂本経尭
- 4. 発掘参加者と主なる担当作業
 - ① 山鹿高校考古学部員

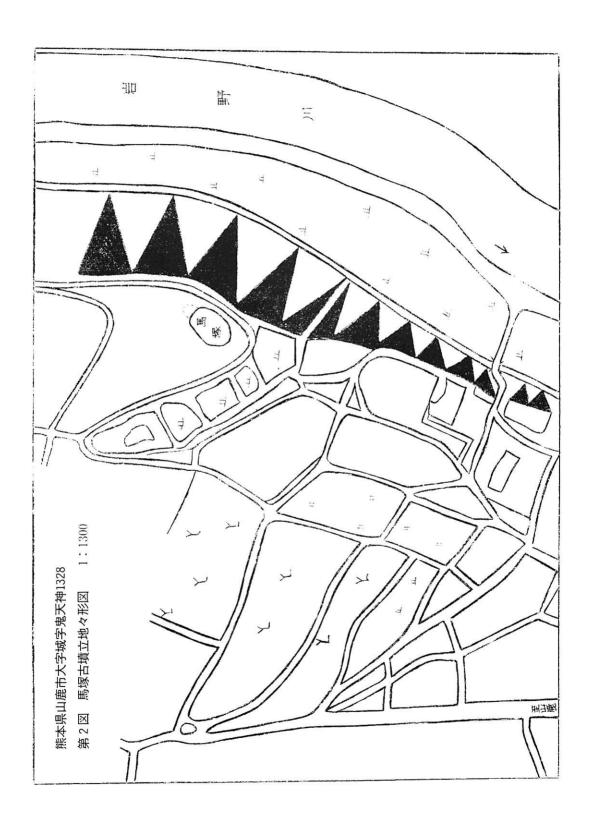
```
部長
   3年 松 本 修 一(総 務)
                       部員
                           2年 斉 藤 綽 子(記
                                           録)
部員
    11
       近藤 誠之助(庶務)
                        11
                            11
                               菅
                                    邦 男 (発
                                           掘)
11
    "
       吹 原 孝 弘(発 掘)
                           1年 桑 原
                        "
                                    憲 彰 (実
                                           測)
"
    "
       松
         永
            敬 護(発 掘)
                        "
                            11
                               前 田
                                    軍 治 (実
                                           測)
"
    "
       宫
         田 安 親( ))
                               黒肥地
                        "
                            "
                                    章
                                      夫(用
                                           度)
11
    11
       広 田 静 代(記 録)
                        11
                            11
                               角田
                                    主 税(発
                                           掘)
"
    "
       松
         久
            み よ (記 録)
                        11
                            "
                               竹
                                 下
                                    浩
                                      正(発掘)
"
    "
       福
         田 弘 子( リ)
                        11
                            n
                               古川敬而(〃)
11
    "
       荒木洋子(庶務)
```

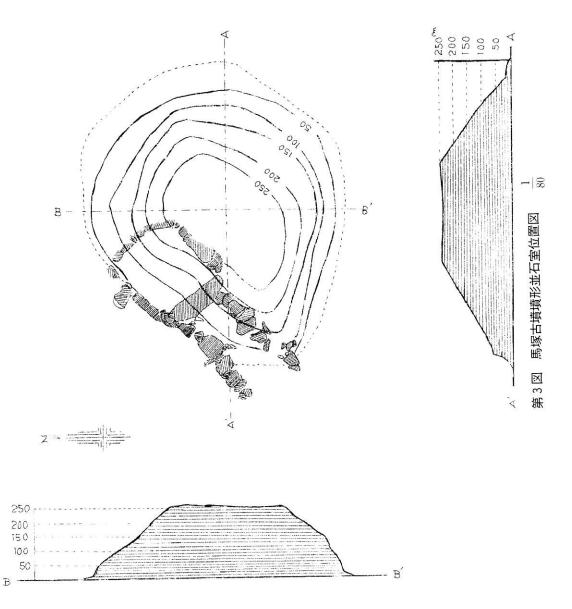
② 卒業生

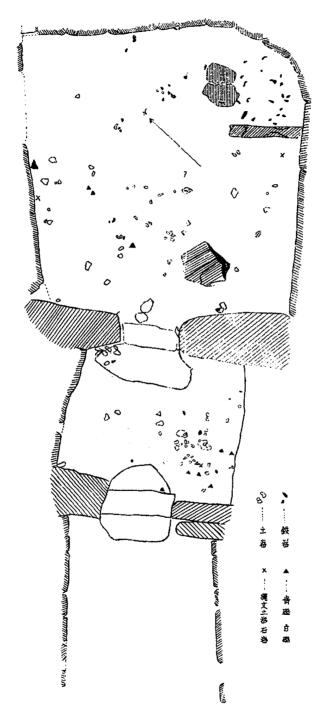
腰 昭 志(前部長、総務) 近 藤 謙 策(前部長、庶務) 藤 実 (渉外、写真)



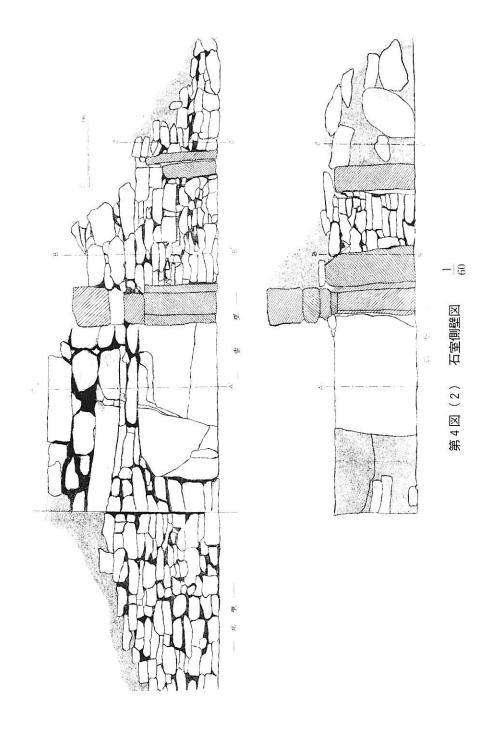
第1図 山鹿盆地北部地形図 (1:60000)

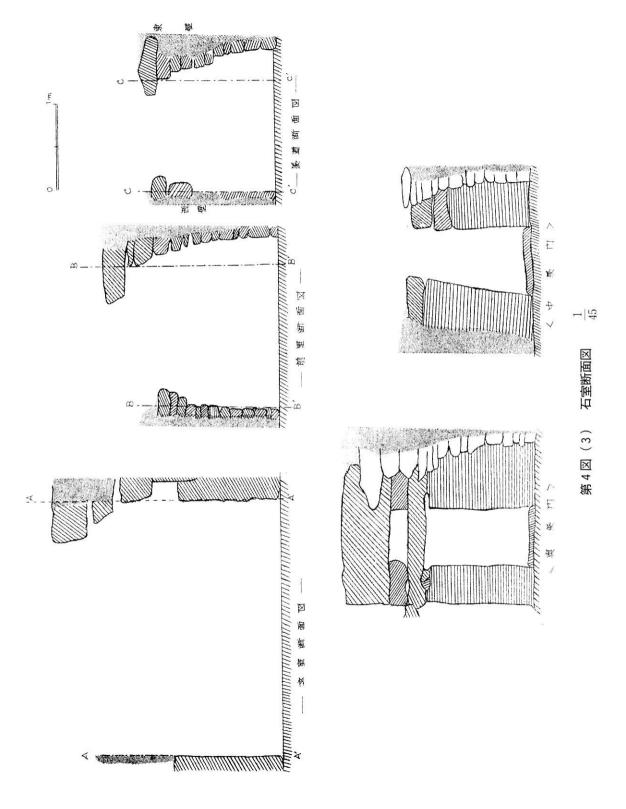


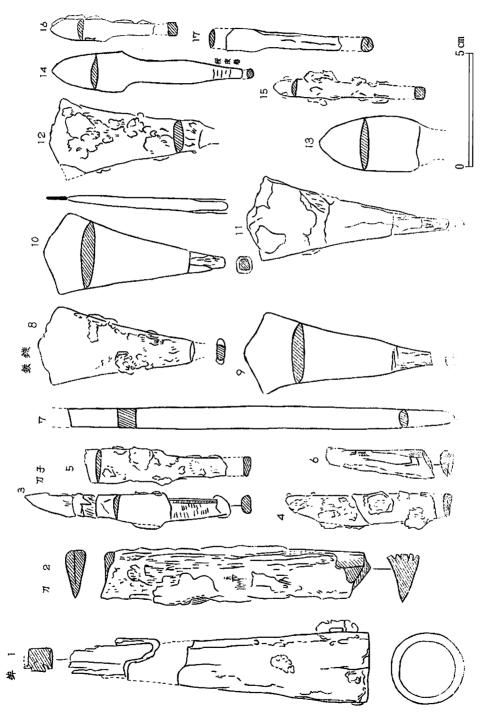


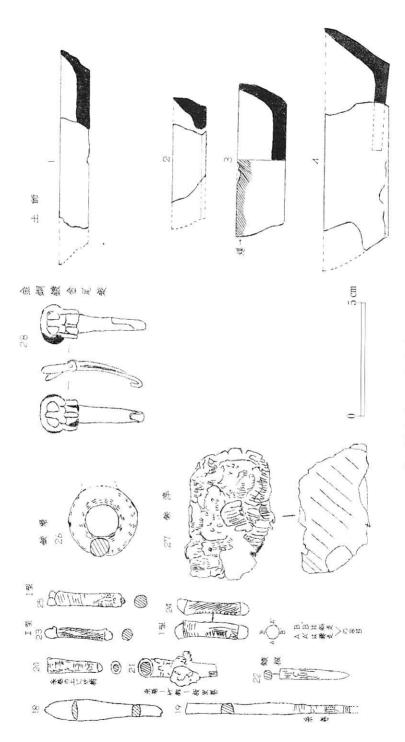


第4図(1) 石室床平面図並に遺物位置 $\frac{1}{45}$

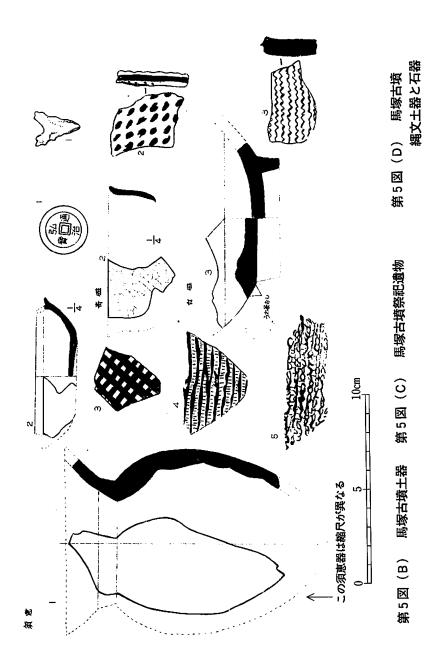








第5図(A) 馬塚古墳鉄器(2)



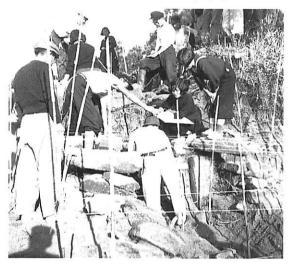
馬塚古墳発掘調査風景(1)



馬塚古墳の遠景(昭和29年当時)



馬塚古墳の近景(同)



同·発掘状況



同・羨門部の状況

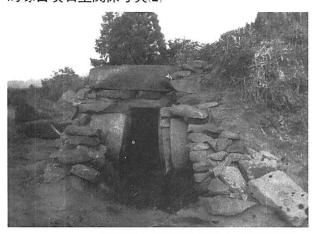


同・玄室上部の実測



同・羨門部分の実測

馬塚古墳石室関係写真(2)



前庭部より石室をのぞむ (昭和29年)



羨道から前・玄室を見る



前室部より玄室をのぞむ (昭和29年)



装飾文様(右袖石)と前室の石組状況



玄室内の石組の状況



家形石棺の残欠

熊本県山鹿市大字石

臼塚古墳調査報告

原口長之

昭和31年7月

熊本県立山鹿高等学校考古学部

はじめに

県立鹿本高等学校の玄関前に1基の石人がたててある。これは臼塚古墳から持って来た もので、この石人の所在によってこの古墳のことは早くから郷土人士の注意にのぼってい た。

ところが最近、考古学についての関心が昂まると共に、この古墳の盗掘をはかる者があった。勿論、村当局からも厳重な注意を発して居たのであるが、それでも密かに発掘を試みる者があり、墳頂には明らかに昨今の掘開と思われる30糎位の凹部が出来た。その上、永年にわたって周囲の畑から削剝され墳形も次第に狭められる状況で、この侭、放置すれば折角の文化財も湮滅するのではないかと思われたのが調査の第1の動機であった。

本文でも述べたように限府山鹿盆地周辺にはチブサン・オブサン・馬塚・辨慶が穴をは じめとする20数基の古墳があるが、一部を除いては本格的な調査が行われていないので、 この際、充分なる調査をなしその性格を明らかにしたいと思ったことが第2。

また臼塚古墳が石人を伴っていたということは装飾古墳として知られるチブサン古墳とよく似ているし、近くには、これも義門外壁に各種の浮彫を有する鍋田横穴群が存在する。もしかしたら装飾古墳かも知れないとの予感もある。もし、そうだとすれば装飾古墳の性格をより明瞭になし得る点で学界に寄与し得るかも知れないという期待があった。

かくて本古墳の調査を計画、熊本県文化財専門委員坂本経尭先生の御指導のもとに、山 鹿高等学校長斎藤寿祐先生を発掘責任者とし坂本経尭・原口長之が発掘担当者となり発掘 届を県に提出し今回の調査となった。

こうして報告書を書きながら常に脳裏に去来するものは、斎藤校長先生と恩師坂本経尭 先生のことである。生来不敏で行き届かない私であるに拘わらず、親身な愛情をもって考 古学部の活動に最善の環境を用意していただくのが校長先生である。学問の世界で長い豊 かな経験を惜しみなく与えて御指導下さるのが坂本先生である。このお二人の先生がなけ れば恐らく本校の考古学部は今日までの成長を見ることは出来なかったであろう。

この外卒業生の限君をはじめとする、私と全く一心同体の関係にある43名の部員、私の不備を黙って補って助けて下さる中村力先生をはじめとする社会科の諸先生、教頭後藤先生外全部の先生方、或は山鹿市教育委員会の江上平助委員長さん、など、思えば私は恵まれた人間である。こうした方々の御厚意に報いるためにも正しい調査によって正しい記録をのこして、古代文化の真の姿を解明し、正しい意味において日本民族の根基に培いたいと念願する次第である。なお、佐賀大学々生 松岡史氏に調査にご協力頂き、遺物写真をおかりした。あつく御礼を申し上げたい。

臼塚古墳調査報告

1. 調査の経過

(1) 発掘の準備

6月下旬から原口は斎藤綽子を部長とする桑原 憲彰、前田軍治その他の考古学部員と共に臼塚古 墳立地々形並びに墳形の実測に当り7月下旬完成 した。

8月3日 原口、桑原、前田、黒肥地は熊本博物館に赴き臼塚出土と伝えられる朝顔型埴輪や須恵器などの実測撮影を行った。

ついで 8 月10日山鹿市八幡小学校に保管する臼 塚出土と伝える円筒埴輪を原口、桑原で実測した。

文化財保護委員会へ届書提出に当ってこの古墳の所有者たる山鹿市石村福本博文氏と折衝する処があったが、同氏は山鹿高等学校卒業生でもあり快諾を与えられ爾後、積極的な協力を辱うした。 更に市教育委員会、市観光課にもその協力を要請し、特に市教育委員会には以後、格別の援助を得た。

(2) 発掘の次第

● 第1日 8月26日 金曜、晴天

午前9時から、斎藤校長を祭主として古閑市長、 江上教育委員長、池田市経済部長、坂本県文化財 専門委員、原口長之並びに山鹿高校考古学部員列 席の上、山科石村八幡宮々司の司祭で古墳並びに 鍬立の行事を執行。終って学校長挨拶、古閑市長、 江上教育委員長の激励の辞、坂本委員の本調査の 意義についての所見開陳、原口から作業上の注意 があって全員、張り切るばかりの心の昂まりのう ちに10時30分作業開始。

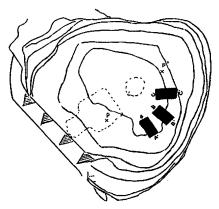
作業に当って前田、竹下、桑原の3班を編成した。

前田班は、予想せられる石室所在地点たる封土中央西寄り(f.1P点)にピットを入れたが11時10分埋没している石室側壁の存在をさぐりあてた。 既に石室は天井を失い室内を埋める崩土の中に点々として円筒埴輪の破片がまじっている事によって盗掘の厄にあっている事を知った。しかし盗掘が床面にまで及んでいるかどうか、一脈の希望をつないで掘開を続ける。午後1時55分、石室西壁より埴輪土偶の腕の一部と推定される埴輪片を発見。2時半頃から石室の全容がほぼ推定し得るようになった。5時10分 義門発見、5時20分石棺の一部を露出した。

竹下班は埴輪列を探索するため封土の東側斜面に幅1米長さ2米のトレンチ(f.1A~A')を掘ったが埴輪列に逢着せず、続けて第2(f.1B~B')第3のトレンチ(f.1C~C')を掘ったが同様の結果に終わった。

桑原班は、立地々形、墳形実測図の補正や記録、 撮影に従事した。午後6時本日の作業を終了。

● 第2日 8月27日 土曜、最天



f.1 1:400

この数年間珍しいと云われた晴天続きも今日あたりから少し崩れかかって薄碌りである。

前田班は、第1日に引続き掘開作業を続行。石室周壁の露出を終ったので10時50分作業を中止し落下石の位置を図上に記録した。(F2参照)

午後、再び作業開始。

2時6分 南壁面、積石の間から小刀子を発見する。深さ1米70糎、この深さになってもやはり埴輪破片が点在する。3時30分 羨門南袖石の丹塗りの上に人物像らしき白色文様 北袖石上に楕円と心葉形を重ねた如き白色文様を発見、この古墳が装飾古墳であったことを確認し全員の意気が上った。(精密調査の結果、北袖石の文様は三角形であることが判明した――第5図(1)(2)参照)

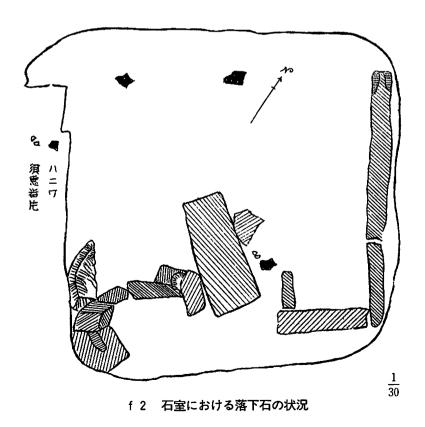
竹下班は、発掘中の石室の位置が、封土中央を

外れて西南に片寄りすぎていることよりして或は別個に、もう1つ石室があるのではないかとの疑問を抱き、封土中央やや東寄りの点(f.1 P'点)にピットを入れ3米に達したが石室に逢着せず。深さ53糎の点に磚を想起させる土師系の土器を3枚敷きならべてあった。この古墳に直結するものか。如何なる性格のものか不明である。(f.3)

桑原班は既に作製せられていた墳形図上に石室 の位置を抑え、あわせて出土品の整理保管、作業 記録、撮影に当った。

午後6時作業中止。

本日は後藤教頭の来援、鹿本町より篤志の松尾晶 氏も参加され終日排土作業に御協力頂いた。この 外元八幡村村長戸上忠雄氏、同部落古老宮本鶴太 氏等も参観され本古墳の伝承、南関山鹿道路開通



-31 -

当時の本古墳切取工事等について説明される処が あった。

● 第3日 8月28日 日曜、公後雨 昨夜降り出した雨は今朝になってもおさまらない。小雨を冒して8時30分作業開始。

前田班は第2日に引続き掘開作業。

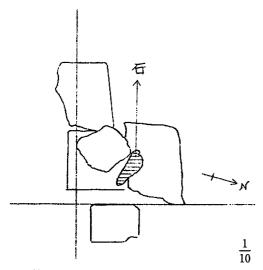
今まで可能な限り移動せずにおいた落下石を取除いた処、その下から石枕発見。作業を中止して、桑原班によって石枕や主要遺物の出土地点を図におとす。(f.4)。

午後になって金銅製杏葉を発見、いよいよベース 近きを知って精密発掘に移る。小玉1個、南壁寄 りに貝殻の出土が多いのに注意さる。

竹下班は第2日に続いてトレンチを掘りすすめたが目的を達せず、ピットの底に「1955、山鹿高校」の文字を刻した板状石を埋めてこの作業を終った。

本日 佐賀大学 松岡史氏。荒尾四中 三島格氏の来援を得。終日第一線にたって御協力を受けた。

● 第4日 8月29日 月曜、雨天



f 3 第1トレンチ発見の磚様土器片の出土状況

早朝から沛然たる雨で全員、前田君宅に待機。 10時30分、やや小降りとなったので作業にかかる。

本日は班編成を解いて全員、石室床面の精密発 掘にかかる。

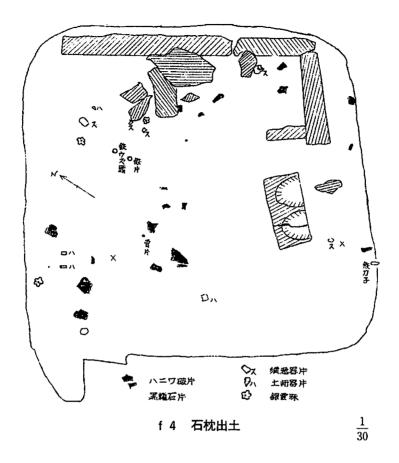
小玉、杏葉、銀環、金環など続々と発見。意気 昂揚する。時々驟雨が来襲するのでそのたびに天 幕内に待避しながら、雨が止めば亦、這い出て行 く。午後6時、作業中止の時間になって続々と小 玉類が発見され、これを図上に記録する余裕もな いので遂に天幕を石室に張りわたし部員が交代で 不寝番に立つことになった。天はいよいよ険悪を 加え夜を通して風吹き雨注ぐ。

本日熊本博物館東光彦氏来援あり、協力に深謝す。

● 第5日 8月29日 火曜、曇天 夜来の雨も朝になると一応、しずまった。しか し、時々思い出したように驟雨が通り過ぎて行く。

精密発掘続行。既に盗掘を受けて遺物の原位置は乱れているものの鉄鏃、丸玉小玉、雲珠など相当量を検出。遺物を採取するとともにその位置を図上に録し、本日をもって一応、調査を終了することとし墓前に敬虔な祈りをささげる。

● 追而。8月30日 原口は9月1日より 新学期開始のため学校職員会に出席したが、坂本 委員、松岡史氏は前田外、数名を指導して義門周 辺を精査の結果、完形須恵器、頸付壺、横瓮を発 見、貴重な収穫をあげた。



2. 遺跡

①古墳の位置

位 置 熊本県山鹿市大字石字臼塚762番地 **所有者** 熊本県山鹿市大字石

福本博文氏

地理調査所 5 万分の 1 地形図山鹿図幅について 言えば図幅の東端より13.4糎、南端より4.3糎の地 点に堆土の記号がある。それが臼塚古墳である。 ②立地々形(挿図第 1 第 2)

本古墳の立地する平野面は菊池川の5大支流の1たる岩野川によって形成せられた洪涵地で、岩野川の、この平野への注入口たる山鹿市津留を頂点とし東を日輪寺熊入台地、西を平小城台地に限られ、遠く南にひらけて山鹿町西部で山鹿盆地の主体部に接続する。高度は津留附近で30米、臼塚

で約25米、山鹿町西部で約10米で津留を頂点として南に緩やかに傾斜している。

この平野面に2米50糎の比高をもつ小高い丘があって、この丘阜上に松原部落の出村が載りその中央に臼塚古墳が立地する。80粍も降雨があれば、菊池川、岩野川の氾濫によってこの平野面は漫々たる湖水となるが、この古墳はさながら湖上の小島の観を呈する。

本古墳周辺の古代文化を概観すれば、この平野の西を限る平小城台地には、川辺小学校々庭に須玖式の合口甕棺が6個体分発見され、同じく川辺村鍋田には羨門の外壁に人物、弓、靱、刀子、楯などの原始絵画を浮彫にした60基あまりの横穴群があり更に付城、小鳥町横穴群は所謂100穴の壮観を呈している。台地上の城では装飾古墳として著

明なチブサン古墳がある。前方後円の横穴式複式 墳で4壁は割石の小口積み、玄室の厨子型石棺に は赤、白、青の装飾文様があり石人1基を有して いた。チブサンの西方約300米に横穴式石室を有す る円墳ウブサンがある。その北方台地突端、鬼天 神には昭和29年山鹿高校で調査した横穴式複室を もつ馬塚古墳が立地する。

同様な古墳はこの平野の東を限る熊入台地にも 5基ある。俗称、辨慶が穴古墳は記録によると赤 色をもって円及び馬の文様が描かれていたといわ れ倉塚、御霊塚、乳母塚、ビシャモン塚等が点在 する。

また臼塚と同一平面上、臼塚の北方約700米に割石積石室で羨道を欠ぎ古墳築造退化期の姿相をもつ河童塚があり、南西300米の金屋塚は現在封土の大半を失っているが、埴輪出土地点を基礎として復元すると直径30米に及ぶ雄大な円墳であった。

この他、山鹿隈府盆地周辺に点在する大小の古墳群は絢爛たる古代文化——殊に石人を伴い、特異な意匠をもつ装飾古墳に主体をおく他と区別さるべき1文化圏を形成し、かつて玉杵名湾一帯に開花した文化が菊池川をさかのぼって此処に1つの足溜りを形成したものとして注目される。

③墳 形

八幡村郷土誌に「前方後円式ナルガ如シ。然レドモ基一部(前方)ハ畑地トナリテ現時ハ円墳ノ如クナレリ」と記載されている。本来、前方後円墳であったものか、円墳であったものか現在の地形からは推定出来ない。

封土は周辺の畑や人家から削りとられ変容しているが、触れば崇りが激しい、何某はこの塚に藷がまを掘ったのでその晩から大熱を発して死んだとか等の伝承が今尚、強く残っている処からみると変容の度は比較的に少ないのではなかろうかと

思われる。墳形図を吟味し、古老から埴輪が多数 埋没していたと聴いた地点と考え合わせると、塚 の東の側が比較的原形を遺しているようである。

西北側の石積みは明治年間に県道開さくの節、 古墳の一部を切り取った際に構築されたもので、 当時、羨道らしいものが見えたがすぐ県官の立合 いで垣を結び、一般人の立入りを禁止し石を積ん だもので、「崇るからというので誰も覗いて見なか った」ということである。現在封土は高さ4米50 糎、直径はその最長部において南北22.2米 東 21.4米ある。

比較的原形を有すると思われる封土東側の部分の円弧を基礎として、この円弧上に 4本の弦をひき、弦の中央に垂線を立てると、それぞれの垂線は M 点に落ちる。従って M 点が円墳をなす本古墳の中点であるとして、その直径を求めると28米60糎の数字を得る事が出来た。勿論、これは封土東側等高線が原形に近いという仮定に立ってのことであるが、とにかく直径28米60糎以上の円墳であったと言えるのではないだろうか。

現在の封土は高さ4米50糎である。調査の結果、石室は既に天井部を失い構築用の石材さえ殆どない状態であるので復元するに困難であるが、丸天井式の石室天井を構築した際、現在側壁が北壁を例に取れば高さ2米40糎で未だ天井部を構成するための内部への積み出しが10糎に過ぎない点から見て、周辺から小口積みにして順次へ内部へむかって積出して来て、最後に板石をかぶせるには尚1米半は必要であろう。勿論使用される石材の大小にもよるが、現存石壁程度の板石として考えて見た。現在側壁上の積土の厚さは平均20糎であるが、この上に更に1米30糎の石室の高さを継足し、更に一般の横穴式石室の場合に準じてその上に約1米の積土を想定すると、この古墳の封土の原形

は現在の4米50糎に2米50糎を加えた、即ち7米 内外の高さとしてもよいのではないかと考える。 とすれば本古墳の封土の高さは約7米、直径約28 米60糎の円墳であったと言える訳である。

本古墳に葺石があったかどうか不明である。埴輪は朝顔型円筒埴輪(挿図第6(E)参照)、円筒埴輪(同上)の完形を存している。また本調査により恐らくは人物埴輪の腕の一部と推定される破片が発見された。それらを並べた位置は判明しない。

本古墳には高さ約1米45糎の石人(挿図第6個 参照)が1基建ててあった。封土の中央に南面し ていたと伝える。明治37年春、現鹿本高等学校に 移され今日にいたっている。

④石 室(挿図 第3)

石室は封土の中央を外れて封土の西南部に内蔵 されている。構築に使用した石材は当地方に多産 する凝灰岩である。

方向は羨門を通過する主軸が南59度西。即ち羨門を南西西に開く横穴式石室である。石室は2つの羨門によって羨道、前室、玄室から成る。前述の県道開通の節、羨道と前室の大部は破壊されてそのあとは石垣になっている。

(1)玄室 (挿図第 4(1)(2)(3))

玄室は実測図に示すように主軸の長さ、即ち 奥壁から羨門にいたる距離は2米55糎幅即ち北 壁から南壁までの距離は2米95糎。従って玄室 の平面形は僅かに幅の広い矩形をなすが南東角、 南西角が隅丸をなし形はややいびつになってい る。

床面には不規則な大小の薄い板状の石片を敷きつめてあり丹を塗彩したあとが見える。側壁は不規則な板状石を小口積みとして、床面から凡そ1米50糎は、ほぼ垂直に積みあげ、1米50糎を過ぎる頃から積み石を順次内部へ送り出し

4壁から天井部へせまって来て、恐らくはその間隙のせばまったところで大きな平石を載せて天井をふさいだものと思われるが、その平石に相当する石は勿論、天井部を構成したであろうと思われる石材は殆ど発見されなかった。盗掘後石材を持ち出したものであろうが、この事は本校が昭和29年に調査した馬塚古墳におけると全く同様な現象であることに注意される。積石に使用した板状の切石には加工のあとが認められず形状も不規則で大小も不揃いで従って積み重ねる時に生ずる間隙には白粘土をもって目塗りをしてある。

(2)厨子型石棺と石枕

玄室奥壁にそうて実測図に示したような厨子型石棺の遺構がある。北側の側石を失っているので内法の正確な数字は出ないが、底面の広さは縦1米89糎、横72糎で高さは1米6糎である。

発掘途中で発見した石枕をこの南壁にそって据えるとぴったりはまるので、この石枕は厨子型石棺にそうていたものと認定して差支えあるまい。但し、この石棺の南壁におかれたものか、北壁におかれたものか、即ち死体が南枕であったか北枕であったかは不明である。頭を受ける凹みが2個あり、一方は大きく他は小さい。一面に丹を塗り白の文様があったらしい。白色が一部に残存している。どんな文様であったか判断出来ない。(f4参照)

石棺に使用している石材の内面は細かく削平せられ石工技術は現在と大差はない。屋根を失っていて屋根の状態は不明であるが、構造上、本古墳北西方、平小城台地に位置する装飾古墳チブサンの厨子型石棺と著しい親近性を有している点に注意される。

石棺と羨門袖石の間に南側壁 北側壁添いに

夫々屍床が一面づつある。南屍床は内法で幅58 糎 長さ1米57糎 北屍床は幅52糎 長さ1米 65糎ある。いずれもうすい、不規則な板状の石 を敷きつめその上にカキ、アサリ、シオフキ等 の貝殻を重ねて屍体を置いたもので、採取した 歯の位置 耳飾りの位置からして足をうちちが えにして頭を夫々西と東にむけて1屍床に2体 宛葬ったものと思われる。

(3) 羨門 (挿図第 4 (2)(3))

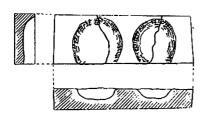
南袖石は幅84糎 厚さ27糎 高さ90糎 北袖 石は幅70糎 厚さ22糎、高さ92糎

袖石をいずれも縦にたてて、厚さ20糎、長さ 1米80糎の長方形の眉石をわたし、更にその上に厚さ26糎、長さ1米44糎の長方形状の不規則な切石を積み重ねてある。

袖石を補強するために袖石の外側即ち前室側に袖石とほぼ同じ高さの石をたてている。南袖石補強の石材は幅約24糎、北袖石補強の石材は幅約16糎ある。

義門の下には両袖石にはさまれて敷石がある。 義門の敷石に続いて前室側に横31糎、たて67糎 の略々長方形の板石があって深さ1糎の切り込 みがある。蓋石をおくための台座である。

厚さ上面で10糎5粍、下面で11糎5粍の入念 に削平した長方形の石で、発掘の時は既に傾い てその間隙から前室の状態が覗かれる程度であ



f 4 石枕

った。

(4)前室

前室は、主軸上で、たては1米60糎、横は主軸上、義門のはしから40糎のところで1米52糎で僅かに縦の方が横より長い。床面形は相当いびつになっている。床に石を敷いてあったような形跡はない。

蓋石を義門におしあててから大きな丸石で前 室側から積み重ね蓋が倒れぬようにしてあった。 (5)装飾 (挿図第5(1)(2))

玄室側壁並に床面に一面に丹を塗彩したものと見えて痕跡が鮮やかに見られる。

厨子型石棺内壁と義門北袖石、南袖石の3ヶ所 に装飾文様がある。石枕も丹塗りの上に白色が 残っているので多分白色の文様があったものと 思われる。

石棺内壁の文様は赤、白、青の3色を使用し 青、白、赤の順序に採色を繰返し、浅い陰刻を もって文様を区劃してある。

文様は統一性のない、稚拙な幾何学文様で浅 い陰刻で三角形を区画してある。

義門北袖石には丹塗りの面上に白で人像を描き、頭部上方に白色の三角状を描く。

南袖石には丹塗りの地に白色の三角形を描く。 如何なる意識のもとに描かれたのか判断がつか ない。殊に注意せられるのは、円や三角などを 主体とする、いわば幾何学文様と、人物像を描 く、いわば形象絵画の2つの様式が共存する事 である。原始絵画の発生について重要な示唆を 与えるものである。

(6)構築状態

石人を伴い、円筒、朝顔型、形象埴輪を並べ 直径30米に近い雄大な封土を有しながら石室が 一隅に片寄り而も規模が小さいこと。 羨門蓋石、石枕、厨子型石棺に見るような近 代的技術と大差ない石工技術を有し乍ら側壁の 積み方、使用せる板状石が粗雑で自然に近い状態において使用されていること

装飾文様を有し、その文様に形象絵画と幾何 学文様の2種が共存すること

構築の全般を通じてチブサン古墳との親近性 が著しいこと

等の諸点に気付かれる。

要約すれば

山鹿盆地にのぞみ岩野川洪涵地の丘阜にこの 地方に豊かに産する凝灰岩を以て石室を構築し た。

まず、板状石をもって側壁を積み重ね、順次、 持送り式に丸天井を作り封土をもって被覆した。 羨道、羨門玄室を区別し床には石をしきつめた。 玄室正面にデンと厨子型石棺を備え恐らくは夫婦の石枕を附設し両壁に屍床を作り、丹を惜し みなく使って塗りあげ、文様まで描いた。封土 は高く7米にも及び武装せる石人囲続する円 筒・形象埴輪は壮厳なる威容をそえた。いかに も地方に雄飛する豪族の永遠の住居をホウフツ させるものがある。

3. 遺物

本地域の殆どの古墳が盗掘の厄にあっている従来の調査の経験から見て、この古墳の処女性についても危惧はしたが、崇りが激しいという伝承や「未発掘なり」という記録によって、もしかしたらという希望があった。ところが発掘に着手して間もなく石室内を埋めている堆土の中から埴輪の破片が点々として出て来るので過去の盗掘は動かしがたいものとなった。併し盗掘されていても、どの程度のものか、或は床面にまでは達していな

いかも知れぬという一縷の希望をもって精密な調査を行ったが徹底的に荒らされていて残片が散乱しているに過ぎなかった。第4図(1)石室床面並に遺物の位置において、採取時の遺物の位置を示したが、この位置は葬送時における遺物の原位置を示すものとは考えられない。但し、遺物の一部については原位置を保持していたかに思われるものもある(坂本経尭氏の第4日塚古墳の考察 4副葬品の部分参照)

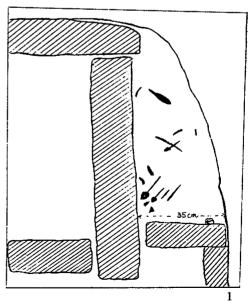
A 武器 (挿図第6(A))

武器には鉄鏃、刀子がある。この外に鉄片が5個あるが用途不明のまま、一応本項におさめた。

鉄鏃、刀子は玄室中央参道及び玄室南東隅、南壁と石棺にはさまれた部位に濃厚に分布する。後者の石棺と南壁の間隔は約35糎でせまくて人体をいれることは困難であるので或は原位置を維持しているかも知れない。

下図 (f5) は採取時の遺物配置図である。

○鉄鏃 ((A)(1)~(78))



f 5 玄室東南隅鉄鏃出土状況 ¹

全部有莖式である。身幅が広く、肉が薄く鎬のない祭祀用として使用されたと考えられる所謂、儀器に属する平根鏃(①~⑩)と身幅が比較的せまく肉のあつい実用鏃に属する尖根式(⑮~⑪)に大別される。その他は鏃柄のみで56個(⑫~⑰)ある。これら77個の鏃類のうち13個((1)(3)(6)(9)(2)(3)(4)(4)(5)(6)(6)(6)(7)(72))には蓋の口巻の部分に木質と巻糸のあとが明瞭である。(8)(25)(34(35)(2)(36)は巻糸のあとは認められず、木質の付着が、(32)(9)は木質は認められず巻糸のあとがみえる。

○刀子(第6図(A) (79~(88))

完形 2 個 (86/87) 一部欠損した刀身 4 (81/82/83) (86) 柄部のみ 2 個 (79/84) いずれも小型で平造である。完形刀子(87)は長さ9.7糎、中央部の身幅 8 粍、角棟で関は明瞭でない。柄を銀で1 糎 1 粍の幅に巻いてある。

(%)はいずれも角棟で関が明瞭で関につづいて木質の付着がある。

(85)は完形で柄は(79)(81)(82)(84)と共に多分鹿の骨であろうと思われるが、骨質が附着している。

(四)は長径2 粍、短径1 糎3 粍の断面形が楕円の 木柄である。上面には(配)と同じく角棟の刃部、下 面には縦3 粍、横1 糎2 粍の茎が見える。木質部 の表面に、直弧文の文様を毛彫にしてあったが風 化と不注意のため剝落した。

○釶 坂本経尭氏 第4、臼塚古墳の考察参照○その他 ((89)~(93))

(89)と(99)は用途不明の鉄片である。昭和30年12月 調査された馬塚古墳からもこれと同様な鉄片を採取した。

馬塚古墳はこの古墳の北方約800米に存在する 古墳後期の横穴式複室墳である。

(別)は直径2糎の鉄環で長さが2糎8粍、約3粍の厚みをもち、中空であるが、鉄環の内部に木片

の付着がある。刀子の茎を柄に挿入し、それを緊 密に締めるためのものであろうと思われる。

(92)(93)は鉄環の一部を残すのみであるが復元すれば夫々4糎3粍、6糎2粍の直径となるが環の内外に木片の付着がある。

B. 馬具 (挿図 第6 (B))

馬具としては雲珠、杏葉、轡鏡板と銜、その他 がある。

○雲珠 ((94)~(103))

唐鞍の尻繋の辻の上に飾った雲珠が5個(94)~(98)。雲珠と正しくは呼称し得ないが同様な用途を持ったであろうと思われるものが5個(99)~(103))。

恐らくは全部、鉄地金銅張であつたろうと思われるが、このうち(M)(101)は腐殖が著しく緑繡も認められない。

(94)~(98)は共に半球形をなし底に脚を出して尻繋につけるようになっている。特に(94)は外径12糎もある大きなもので埋葬当時の豪華をほうふつさせる。

(99)~(103)は平たくて所謂、うず高くのウズをな していないが用途は雲珠的なものであろうと思い 本項におさめた。

○杏葉(104)

金銅製。長さ13糎1 粍、横は最長部で9 糎1 粍。 厚さ2 粍の薄板に図の如き透の文様を持っている。 玄室内中央参道、南屍床より発見した。一面に緑 繊をふいている。

○鉄環と銜((105)~(107))

鉄環が2つある((105)(106))

(105)は外径7糎3粍、内径4糎、7粍の厚みを 底辺とする三角形の断面を有し、轡の鏡板らしく 思われるが断定し得る資料がない。

(106)は外径7糎、内径5糎4粍、断面形は隅丸

の矩形をなし轡の引手と喰先を連ねる搦の輸では ないかと思う。

(107)はa・bとも銜で長さが6糎6粍ある。 その他 ((108))

1菱形の鉄地金銅張りの金具で対角線の長い方で9糎8粍、短対角線が4糎あり、それぞれの頂点に鋲の丸い帽子をもっている。脚があったことは明瞭で、恐らくは馬具の3繋に付せられた金具で後世の攝蝶とよばれるものであろう。((108))

2 (109)と(110)は銀製の飾具である。夫々1糎 6粍、1糎5粍の小さい雲珠状をしている。どこ に使用したものか不明である。

3(111)は外径3糎6粍、内径1糎4粍の、断面は厚さ約5粍の矩形で馬具の一部と断定し得るものはないが一応、ここに収めた。

4(112)~(125)は用途不明の鉄の薄片である。

(112)~(116)までは薄い鉄板で(112)と(114)には木質の付着がある。(117)~(125)はいずれも薄い鉄板に鋲をつけ(117)(119)は鉄地金銅張であって金色が残っている。(122)(123)には鋲の脚のあたりに木質が残存している。鞍橋の装飾として鉄地金銅張の薄い鉄板を張ったものではなかろうか。

C 服飾品 (挿図第6 (C))

服飾品としては銅地金被せ鐶、水晶勾玉、水晶管玉、水晶切子玉、濃青色ガラス丸玉、ガラス小玉、泡玉、銀環、鉸具、鉤具、其他がある。但し鉤具を服飾品に取扱うことには疑問がある。むしろ馬具に入るべきだとも考えられるが暫くここに収めた。

○銅地金被せ鐶 ((126)(127))

所謂耳飾りで(126)は径縦2糎6粍、横2糎9粍、 僅かに楕円形をなし銅地に金被せした技法を示し ている。保存状態はきわめて良好で金色が美しい。 鐶体の径は7 粍弱で、ほぼ円形の断面をなし2 粍の開きをもっている。南屍床の東障壁附近に発見された。

(127)は径、縦2糎8粍、横2糎4粍、鐶体は径7粍弱で断面は楕円形で2粍弱の開きを有している。銅地に金被せの手法であるが薄い金板は剝離の個所が著しく、環体の内壁に一部金色をのこし緑繊が吹き出している。

○水晶勾玉 1顆((128))

長さ1糎9粍、頸部の幅8粍弱、形状はややコの字型に近づいて来ている。孔道は一方は径3粍あるが反対側は細くなって2粍弱となっている。

○水晶管玉 ((129))

長さ1糎9粍、径7粍、孔道は一方が約3.5粍、 他方が2粍弱で孔の通し方は図で示したように軸 の中心を通らず歪んでいる。孔道には朱色が鮮明 にのこっている。それが朱であるかどうか調査未 了である。

○水晶切子玉 5 顆 ((130))

長さ6糎3粍弱、上面の径5粍、下面の径4粍、 胴の稜の部分で7粍強、孔道の大きさは一端は径 3.5粍、他端は1.5粍で、孔の大きさがその両端で 著しく異なっている。5顆あるがその1例を図示 した。他の4顆もおおむね、これに準ずる。

○ 濃青色ガラス丸玉 19顆 ((131))

19顆ある。多少の異同はあるが、その1例を図示した。長さが6粍、径が9粍、孔道の径3粍、孔の大きさは両端とも大差はない。

○ガラス小玉 122顆 ((132))

大小さまざまであるがその1例をあげると長さ4 粍、径5 粍、孔道はやや大きく2 粍の径をもつ。 濃青色61、青色36、黄色22、緑色2、赤茶色1 ○ガラス泡玉 11顆 ((133))

長さ2粍、径2.5粍、孔道は両端とも大きさが同

じく、1 粍の径を持っている。濃青色 5 、青色 1 、 緑色

○5銀環 4個((134)~(137))

いずれも銀製。(134)は外径2糎5粍、内径2糎。 環体は菱形の断面を持つ。耳飾りのように約2粍 の開きを有している。

(135) (136) (137) はいずれも円い環体を有し、1 粍弱の開きがあり、(136) (137) は外径1糎5粍、 (141) はそれよりやや小さく外径1糎3粍である。 ○鉸具 7個 ((138)~(144))

今日でいうビジョウであるが着装の状況は不明、 馬具の項に収めるが適当かとも思うが一応、ここ におさめた。

○鉤具 5個((145)~(149))

鉸具と同様、着装の状態不明。服飾品に入れる ことにも疑問がある。

D 容器 (挿図第6 (D))

容器は土師器の1例を除く外、すべて須恵器で ある。斂葬時の原位置が不明なことは残念である が、いまその主要なものについて記述する。

○頸付壷 1個((150))

○横瓮 1個((151))

 る。

○高坏 1個((152))

- ○坏の蓋 1個((153))
- ○坏 2個((154)(155))

蓋坏の身で蓋を失っている。

○須恵器破片 4個((156)~(159))

床面から12個、掘開中の堆土から42個を採取したが、口縁部などの4例を図示した。他は胴体部の細片で須恵器として通例のものである。

E 石人 (挿図 第6(G))

鹿本郡誌に、臼塚に関する次の記録がある。「八幡村石村製糸場の向にあり。前者と同じく貴人の墳墓ならん。埴輪の破片周囲に散乱せるあり。中央に南面したる一大石人ありしが明治37年春、鹿本中学校生徒中島秀雄氏(大阪毎日記者)に発見報告せられ、現在同校に保管せらる。其後チブサンの石人、菊池郡花房の石人、熊本市池田の石人等を発見せるが、その端緒は全くこの石人にありしなり 東西9間 南北7間 高さ4間」とあるが、文中の石人は現在鹿本高等学校に保管されている。

凝灰岩で作られ首を失ってヤッコダコ型を呈している。高さ約1米50種、全面の肩幅91種、胸囲161種、腰部のまわり240種、胸部の全面の幅61種、脚部の周囲159種。チブサン発見の石人と同じく背面に靱を負い胸に短甲を着し明らかに武装した姿をあらわしている。丹を塗ってあったらしく胸部から腰部にかけての4ケ所にかすかに丹のあとが見られる。

F 埴輪 (挿図 第6(E))

完形としては熊本博物館所蔵の朝顔型円筒埴輪 と山鹿市八幡小学校所蔵の円筒埴輪がある。大小 の破片は多数あり、山鹿市山鹿中学校所蔵の円筒 埴輪片などは比較的損傷が少ない。円筒埴輪の外 に今回、恐らくは埴輪の腕の一部と推定される一 片を得た。

熊本博物館所蔵の朝顔型円筒埴輪(160)は山鹿 市石村、戸上忠雄氏の言によれば、山鹿南関県道 開さくの際、同氏等が現在の封土の北西隅より掘 り出したもので、上部が朝顔状にひらいて所謂、 朝顔型を呈し高さが68糎、上面の朝顔型口縁の外 径26糎、脚部外径20糎で色相、刷毛目は通常にみ る円筒埴輪と変らない。この型式の埴輪は相当存 在したらしく、その破片を保存している者が相当 ある。

八幡小学校所蔵の円筒埴輪((161))は高さ50糎、 上面外径30糎、底面外径20糎の通例の形式である。 (162)で示した破片は今回の発掘途中、玄室内堆土 のなかから採取したもので色相、焼成共に円筒埴 輪と同質である。図示した如き湾曲より見て恐ら くは腰に手をあてた姿勢をとった際の腕の一部分 に当るらしく思われる。

G 貝類(挿図 第6 (F))

アサリ、カキ、シオフキの3種を検出した。南、 北屍床に不規則な板状の石を敷きつめ、その上に これらの貝類を敷いてあった。 授乱されて貝殻層 の厚みは測定出来なかった。

H 人骨

人骨は腐蝕して採取困難であった。南屍床、北 屍床とも夫々、西壁と東壁付近に骨片(骨粉とい うが妥当か)と歯が位置した。歯のみ3個採取、 他は採取出来なかった。南北屍床とも夫々西と東 に、足を打ちちがえて2体宛、葬ってあったと思 われる。

4. 考察

臼塚古墳の調査に加わった1人として発掘中の 所見に基づいて2、3の所見をのべよう。

①墳形(挿図 第2 第3)

熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告 第2冊 「鹿本郡臼塚と其の石人」に下林繁夫氏実測図を かかげ梅原末治氏の考察が述べられている。「西方 約120尺を隔てる一小隆起部」と「中間に埴輪円筒 列が2列東西に列んでいたという聞込み」によっ て「西に向いた前方後円墳に複原し」「長軸230尺 チブサンの封土より遥かに大なる飄形墳」とな り「臼塚なる名称また此の場合思ひ併す可く」と。

肥後に於ける石人を装飾した古墳のうち墳形の確かな荒尾・三宮、山鹿・チブサン、菊池・フタ塚などは前方後円墳であるので、この臼塚が同じく前方後円墳の制式をとることに支障はない。前方端にあたる小堆土には石槨らしい部分が記されていて墓室の複合が考えられるが、これに類するものに菊池郡七城村蛇塚では前方部に長軸にほぼ平行して箱式石棺の複合が現存し、阿蘇郡一ノ宮町中通古墳群中の主墳、長目塚では前方部の端に竪穴石室が複合していたことが確認されているので臼塚の場合も、この墓室をもった小堆土を含んだ前方部を想定してよろしかろう。そうすると後円部石室は「クビレ部」に開口することとなり、石人の位置は、もとこの石室羨道上の封土にあたることとなる。

封土と埋葬主体部との関係は前期に於ては封土の中心部に占地されることが通例であり玉名郡院塚(#1) 玉名郡江田船山(#2) などは、その好例である。横穴石室墳に於ても熊本市千金甲(乙)上益城郡大塚熊本市稲荷山のように年代の古いものは玄室は封土のほぼ中心部にあたっている。臼塚の場合は石室の位置は封土の西南部位約5分1位の面積

に相当して玄室は封土中心部よりずれて仕舞って いる。このような事情は石室を覆う封土が内部主 体を守るためのものだけではなく、墳の外容を壮 大にして被葬者、又その所属社会の権威を墳によ って誇示しようとする意図が蔵されていると思わ れる。更に弥生墳墓に於て顕著な一定の地域を定 めて共同墓地を営んだ社会性格が弥生時代社会の 延長として発達した古墳時代社会に於いて消滅す ることがなかったことは玉名郡院塚前方後円墳の 後円部に3ケの船型石棺を次々に埋葬した例から も理解されよう。壮大に築きたてた墳墓が1人1 墳の制によるものでなく所属社会の共同の権威を 表象(#3) するものであるならば同一墳墓に、その 社会の中心にあった人々の合葬がなされても不都 合ではない。大陸に源流する横穴石室が急速に流 行するにいたったのは、このような社会事情によ ったものであろう。従って横穴石室への埋葬(164) は只1回のものではなかったのである。人々が仰 ぎ見るように「しるくしめ立て」た壮大な封土の なかの横穴石室の羨門トビラは何度か開かれたの であろう。チブサンの横穴石室は封土主軸とほぼ 直角に南に向けて開き羨道入口は封土中に深く没 するものではない。臼塚石室は西南に向けて開き 羨道入口は封土裾に浅く埋れる位置となる。

今回の調査では臼塚が前方後円墳であったという資料は見出されていないことは原口記述の通りである。

- 注1 玉名郡睦合村開田の丘陵上の前方後円墳 周湟あり、後円中心部に形式の異なる3個の船型石棺があり、そのうち中央の地下深く埋まっていた割竹式ともみられる穿抜き石棺の枕部の上位に舶載神獣鏡が副葬されていた。坂本経尭著「院塚古墳の研究(概説)」(玉名社会科研究会報第10号)
- 注2 著明な古墳で紹介の必要はないが本文関係の事項 を略記しよう。柄鏡式前方後円墳の後円部封土の中 心より前方にかけて大型の家型石棺が埋められ前方

部方向に横口があき**美道が設けられている。この部位は埋葬後封土を盛って完全に封せられたと思われる。**

- 注3 万葉集巻18「天平感宝元年5月12日越中国守の館にて大伴宿祢家持作」「陸奥国より金を出せる詔書を賀く歌并に短歌」の反歌3首の1「大伴のとほつかむおやのおくつきはしるくしめたてひとのしるべく」(神典)
- 注 4 古事記上巻 伊邪那美神火神を生み遂に神避り比 婆山に葬したが伊邪那岐命妹伊邪那美命を相見まし く思って黄泉国に追い往く段は横穴石室墳における 葬の状態を物語るものである。伊邪那岐命が逃げ還 りますとき身につけたいろいろなものを投げすて、 「ヨモツシコメ」の難をまぬかれたというあたりは 石室に散乱する耳鐶や玻璃小玉などの状態を示唆す るようである。

②石室の構造について

(図版 第2~第4 挿図 第4の(1)~(4))

2つの羨門によって羨道、前室、玄室に区分された横穴石室に複原されるがかって県道開さくのため羨道と前室前半が破壊された。羨門部、棺槨部などは「ノミ」痕美しい切石組みの優秀な技術を示している。玄室正面には厨子型棺槨があり、1枚の板状切石を床とし側壁が立ち屋根型棺蓋があったらしい。ダブルとなった石枕が添えられる。棺の正面は幅広からぬ両袖石によって羨門にむけ開いていわゆる厨子型を呈する。内側は三角連続文を赤、青、白の3色をもって鮮かに彩色され、床の敷石面には丹が厚くぬられていた。

東、西の側壁に接して、板状切石を組合せた箱 式棺が設けられ敷石床の上に海の貝殻が厚く敷か れている。貝殻を褥として埋葬されたのである。 この3つのコ字状棺槨の中央は板状の割石を組合 せたギッチリとした敷石床となっている。

羨門部は両袖石の間に切石の敷居石をはめ込み 前室から板状大石をもって閉塞し、この戸石の外 に敷石が横たはっているという厳重さである。

天井は割石小口積み、丸天井で原口複原によれ

ば約3米50糎の高さとなりチブサンにほぼ等しい。 総じてこの石室はチブサンに親近してやや小型 であるが構築技法は遥かに優秀さを示している。

玄室の奥正面に厨子型棺槨と左右に箱式棺とを設けたものは肥後における横穴石室墳の顕著な特色で、山鹿、チブサン、菊池袈裟尾高塚、飽託釜尾、熊本稲荷山、熊本千金甲甲、上益城犬塚、同じく六嘉井寺などがそれで総て装飾古墳であることを注意したい。更に玄室に於ける门字形棺槨は岩崖に穿った横穴古墳にも鮮やかに穿り抜かれていることを考え合せると伝統の根強さが窺われる。前期箱式石棺と横穴石室との複合によった地方性格であろう。

石枕(#5)の存在は注目してよい。発掘に際して は棺槨の間の敷石上に3個に破壊されて1片は上 向に2片は下向になって出土したが接合してダブ ル石枕となった。幅約70糎、縦25糎、厚さ11糎の 矩形の板状灰熔岩に2ケの円い頭のせ部を並べ穿 ったもので、石は直径約24糎の円形で深さ約4糎、 左側は径約22糎の円形で深さはやや深く5糎とな っている。大にして浅いものが男子用、小さくて 深いものが女子用であろうことは体格や頭髪の状 態から推察し得る。右が男子、左が女子の位置と なることは後世の儀式の規準を示すものとして重 視してよい。この石枕が南、北の位置によって、 棺内の奥に位置するものの男女別が逆となる。棺 槨の北側は破壊されているので仮に南側に復原す ると正しく位置するし又東或は南に頭位を置く例 が多いという一般例からみても南側に置かれたと してよろしかろう。そうすると墳室正面奥の位置 は男子の座となるのである。墳の主体が男子であ ることは当時の社会規律を示すものとして重視さ れる。

注5 古墳に於ける石枕の例は多いものではない。船型 石棺には造り出しの枕が多い。箱式石棺には粘土枕 が残っている場合がある。天草、維和、千崎箱式石 棺では1体の男性骨が粘土枕に頭骨をのせて仰向伸 展葬されていた。粘土枕は円形中凹みで丁度院塚第 2、3号船型石棺の造出し石枕と同じ形式であった。 宇土郡三角町磯山には箱式石棺群があり、その1棺 には穿込部のある石枕が副えられていた。大体臼塚 に類する不知火家型石棺にも刻込みの枕があって棺 に仰臥伸展葬する場合には何らかの枕を用いること が普通の習しであったのではあるまいか。粘土とか 石とかで作られた枕だけが残ったものであろう。横 穴石室墳の時代となれば服飾品も随分と進歩してい るので飾られた枕もあってよいが残るものが少ない のは植物性のもので作られたからなのであろう。臼 塚では前期の伝統が重ぜられて石枕が作られたため に全床2体埋葬の風習のあったことを後世に証する こととなったのである。而も太さと深さをことにす る2つの枕が同一な板状石に並び穿たれたというこ とは男、女並び臥す寝室をも具現し更に又その位置 によって儀式の座にも規律のあったことをも示唆す るもので誠に興味深い。

③石室の装飾文様について (挿図の第5の(1)(2))

肥後の古墳石室の装飾文様が北九州の絵画的文様に比較して幾何学的な文様が多用されていることは又一面の特徴である。直弧文(井寺(#6)、長砂連(#7)〕や翳羽を表した弧と蕨手の複合文〔釜尾(#8)〕など或は鏡を表した円文、矢筒、大刀、船、人物などの特殊な文様も描かれているが三角連続文が最も多用されている。

臼塚玄室内壁は丹を塗彩した「赤い石室」で床の敷石まで丹に染まっていた。文様は正面厨子型 棺槨内壁と羨門両袖石の内壁に異なった意義を内 蔵する文様が描かれていることが注意される。

厨子型棺槨はノミ痕の美しい加工板状石をもって囲いその内面に三角形を2段に連ねた文様帯をめぐらしている。下端より約32糎(1尺5分)の幅2段の横線を引き、その横幅を約22糎に区切って1つおきに斜線を引くと高さがやや高い三角形

の連続文が素描される。この三角面を赤、青、白で塗彩しているが、その一部は赤、青、白の順となっている。この3原色を交互に塗彩した華麗にして尖鋭な文様の壁に囲まれたなかに置かれた男女の並び臥す石枕にも丹と白の塗料が残っている。

義門両袖石内壁の文様は南側の人像と北側の三 角文とである。人像は丹塗の面に白をもって描かれ頭は明瞭でないが両腕を両側に張り両脚を力強 く踏み広げたもので気負ったすがたが力強く描かれている。頭部の上位にはあたかも帽冠のように 白の三角文がみえる。北側の白の三角文は丹塗の 上に浮かされた文様。発掘頭初は円文のように見 られたが後で壁面を噴霧器で洗滌すると三角文と なったという。

岩野川右岸の鍋田横穴群(**)は臼塚に相対する 位置にあり第27号横穴入口には羨門に接して右手 に剣を持ち両脚を踏み広げた人像が浮彫されてい る。これに類するものに城の横穴浮彫がある。あ だかも兵を持して羨門を守るかのような姿勢をも つもので単なる墳墓の表飾ではなく墳墓の威厳と 守護を表すものに相違ない。石人も又同様な意義 をもつものであろう。臼塚羨門内壁の人像も同様 な意義に解してよろしかろう。又この人像と相対 して羨門を扼くする北壁の独立三角文も単なる装 飾文ではなく同様な呪禁の意義をもつものであろ う。呪禁の意がこもると考えられる三角文は剣の 尖りを表すものではなかろうか。そうすると三角 の連続文は抜ぎ放った多数な剣を表すこととなり、 墳墓の表飾に多用される意図が窺われよう。

肥後の装飾古墳の文様に幾何学的文様が多用される意義については別に考究されねばならない。

- 注 6 熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告 第 4 冊 井 寺古墳の部
- 注7 天草郡大矢野町長砂連古墳は天草松島の海にのぞ む丘陵上にある。石室下部を凝灰岩の切石を以て箱

式に囲い義道に面する側壁上に僅かな切込を附しただけで義門は形式化している。両側壁に浮彫の直弧 文がある。

注 8 右仝調査報告、釜尾古墳の部

注9 右仝調査報告、鍋田横穴の部

④副葬品について

(挿図 第4(1) 石室平面図並に遺物配置図)

肥後の装飾古墳にして副葬品をものは僅かに熊本市稲荷山(#10) 菊池郡隈府町袈裟尾高塚にすぎなかったがここに臼塚を加えることは誠に貴重である。分類を精密にし個々の複原を進めて然るのちにして総合考察が可能であるが本報告を早急にまとめねばならぬ事情のため出土当時の状態と主要遺物について注意をしよう。

この古墳石室内部は異常な破壊を受けて撹乱されていたので遺物は原位置を離れているばかりではなく主要なものは奪い去られていることであろう。原位置を保っていたと思われるものに左の群がある。

- (1)正面厨子型棺槨と南箱式棺と石室側壁との間 に三角形の空間を生じているがこのなかに鉄 鏃の一群があった。鏃尖が西北に向けてほぼ 揃っていたので鏃を下にして石室側壁に立て かけた状態に副葬したものであろう。(石室平 面図 参照)
- (2)南箱式棺内の東より貝殻床上に金鐶1玻璃小玉3があった。金鐶には銅線らしいものが附着していた。「ようらく」を吊したものであろう。中央線より南に片寄っているので、この棺中に1体が仰向けに伸展葬された場合には左の耳飾となる。右は失われている。至近に人歯があった。又西側にも人歯が出たので2人の合葬棺である。
- (3)北箱式棺 東から中央にかけて多数の玻璃小 玉群が散乱していた。この部位に人歯がある

ので首飾の結い連ねた小玉であろう。西側に 銀鐶1ケがあった。打ち互に葬った2体の女 性らしい。

- (4) 羨門部東側に須恵の高坏 敷居石上に須恵壷、 閉塞石と北袖石の間に堤瓶がはさまっていた。 葬祭献供の場合に、それらが羨門内に近く置 き並べられたものとしてよろしかろう。
- (5)棺槨中間の敷石上の遺物は、刀、刀子、鏃、水晶勾玉、仝管玉、仝切子玉、玻璃小玉銀鐶馬装貝類などの残片がバラバラに散乱していた。馬具残片は大体に北半に多いが1ケの杏葉は右半にあり、鏃、刀子類は中央に多く、銀鐶2ケは北の東よりに、勾玉、管玉は南側に、玻璃小玉は全面にというように一応の群は認められるが頭初の位置かどうかは不明である。
- (6)正面厨子型棺内には北側に鏃、雲珠片などが バラバラに出土した外にほとんどみるべきも のがなかった。石枕は打ち割って敷石床に持 ち出され、北側の側壁を失い、一枚敷の石床 も打ちかがれているという状態であるから副 葬品があったとしても或は持ち去られ、或は 敷石床面に搔き出されたのであろう。

に直弧文らしい線刻があったというが惜しくも実 測を経ず剝離して仕舞った。

日本書紀巻第6 垂仁天皇88年秋7月 新羅王子天日槍が持ち来った宝物の条に出る「出石刀子」など、古典にあらわれる刀子は「霊威あるもの」として常に身につけていたらしい。霊威ある刀子によって処理された道具や食物は自ら神聖なものとなって、その人を幸栄えるという信仰は船山古墳副葬大刀銘文(**12)によっても窺いうる。延喜式巻第5 斉宮年料の供物の条に「刀子11枚(10枚は長さ各5寸 広さ3分 1枚は長さ1尺 広さ1寸)とある。その他神祭献供品の中に刀子が何枚か加わることが多い。当時神も人も刀子を身辺の必需品としたものであって数本がセットとなって、その1組の中には大小の刀子があったのである。

宇土郡三角町平松遺跡(#13)箱式石棺例では剣型 刀子が頭骨に接して副葬されていた。阿蘇郡一の 宮町中通古墳群中の長目塚前方部竪穴石室では頭 部をとりまくように8本の刀子が副葬されていた。 菊池郡迫間村西迫間横穴では腰部に相当する部に 刀子が見出された。刀子副葬は身に装したものと、 霊威あるものとして頭辺に副えたものとの二途が あったようである。

臼塚は撹乱のひどい石室で8本の刀子がどのように副葬されたかは窺うことが出来ない。大小の刀子、鹿角柄らしい6本の実用刀子と銀巻柄の飾られた2本の刀子とは当時の生活と儀式との規律とを示すものである。

注10 熊本市清水町 坪井川にのぞむ丘陵上の円墳、長い義道の奥に玄室があり、安山岩板石を煉瓦積みにした丸天井、厨子型棺槨、左右箱式棺がコ字型に施けられ、それらの障壁に重圏文が赤、黒、背で描かれている。仿製鏡 玉類 直刀、鏃、須恵器等が大体原位置で見出された。昭和23年熊本短大学生高志与市君らによって発掘されたが調査報告は出ていな

۱, کا م

- 注11 迫間川にのぞむ丘陵上の円墳で濠を周らしている。 羨道、前室、玄室があり、玄室には正面に厨子型棺 槨、左右に箱式棺、赤い石室で、厨子型棺槨の奥壁 内面に三角連続文、矢筒を線刻している。破壊墳が 更に荒されたとき金鐶、銅かむせ鋲とめ金具、馬具 類、鉄鏃、土師高坏、須恵器類破片等が出た。正式 調査でなくその位置はわからない。
- 注12 熊本県史蹟名勝天然記念物調査報告第1冊 坂本経尭著「肥後に於ける製鉄遺跡の研究第1編」 船山古墳副葬大刀銘文

「治天下 復之宮大王世 位人 名 无加互 八月中 用大鉛釜 并 四尺迁刀 八十鍊 六十捃三寸 上好太刀 服此刀者 長寿 子孫洋々 得其恩也 不失其所統 作刀者 名 伊太加 替者 張安也」

注13 平松遺跡は、宇土半島の突端部古代の波多入江に のぞむ岬で、弥生甕棺群 箱式石棺群 円墳群が広 くない丘陵に立地するという注目すべき遺跡である。 調査報告執筆中である。

釶(ヤリガンナ)(附録(1)肥後釶の集成)小刀の 先を反らして突きけづりに使用するもので弥生木 器には釶のあとが美しく残ったものが多い。箱式 石棺内に副葬される場合が多く荒尾市野原(**14)例 は石室の下に埋っていた箱式石棺中の只一の副葬 品であった。図1、尖が笹葉状に尖って中凹とな り柄部が1度下に反り切先が上方に反っているこ とは突きけづりにも横けづりにも適当である。

臼塚2は長1、2糎位で野原に比して柄が短く 刃部は手もと近くにあるので横けづりに都合よい。 岩原(#15) は双子塚前方後円墳の立地する高台の 北側崖の横穴群の一墓出土で、刃部は片刃で全長 16糎鹿角柄が刃に近く附されている。横けずりに 都合よい。

注14 坂本経尭著「荒尾、野原古墳」

注15 昭和31年3月9日佐賀大学生松岡史、志佐小柳津 三君が岩原双子塚を見学して、この岩原横穴に野営、 翌日横穴を清掃した際に轡1具と共存しているのを 発見した。他に鉄鏃2尖、須恵坏破片1があった。

⑤玄室の破壊状態について

義門閉塞の板石は前室に向けて傾いているが大体現状を保っているので義道部から侵入したものではなく、傾いたのは玄室からの圧力によると考えられる。玄室の述べる所の破壊は石室天井石を除き東南の積石を破って侵入したものである。普通の盗掘であれば厨子型棺には正面から容易に入ることが出来るので棺蓋をバラバラに破壊する必要はない。ことに石枕を打ち割って引き出すようなことは宝物を盗む目的には必要ないことである。

このような玄室中の主要構造の異常な破壊状態は近くの馬塚(#16)玄室にも見られたことである。 屋根型棺蓋の一部を残して他は左右の棺槨材と共に運び出されていた。このように墓室の中心部を無惨に破壊することは単なる盗掘の所為ではなく 墳墓を破却するという目的が加わったものと考えてよい。

書紀継体22年(528)の記事又風土記逸文、筑紫 君磐井墓墳の項によると、磐井は生前に壮大な寿 陵を造り石人、石盾、石猪、石馬を樹立し石殿、 石蔵を副造したが、亡ぶるとき石人の手を撃ち折 り石馬の頭を打ち堕したことが記されている。墳 墓が一族の権威の表象として営造されたならば、 その一族を打ち倒す場合に、その権威を破却する ために、その墳墓を破壊することはありうること である。墳墓に樹立した石人という特殊な分布圏 を磐井寿陵と同じくする菊池川流域のうち、その 中心地域にあたる山鹿市周辺の馬塚、臼塚古墳に 墳墓破壊の異常な相を見ることに特別な疑いをと どめて後証をまとう。

注16 原口長之著 馬塚古墳調査報告

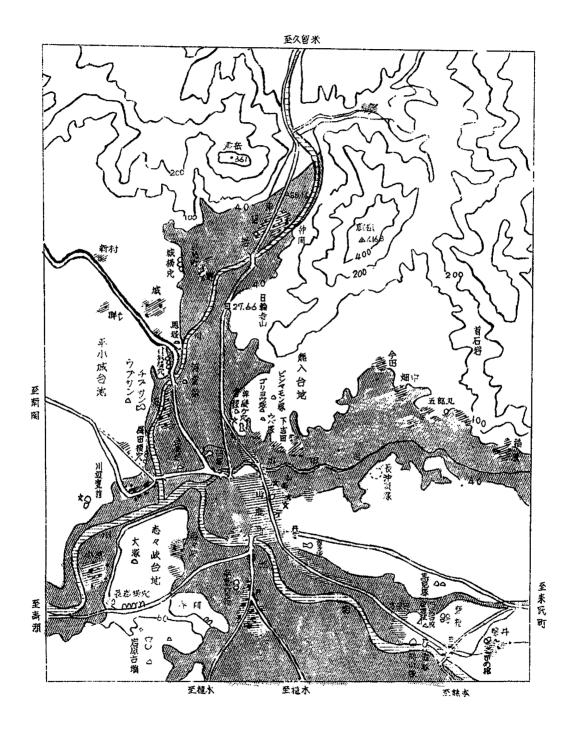
⑥臼塚古墳の年代観

船山古墳家型石棺に横口が開き羨道が存することは当時既に横穴石室墳の存在を示唆するもので

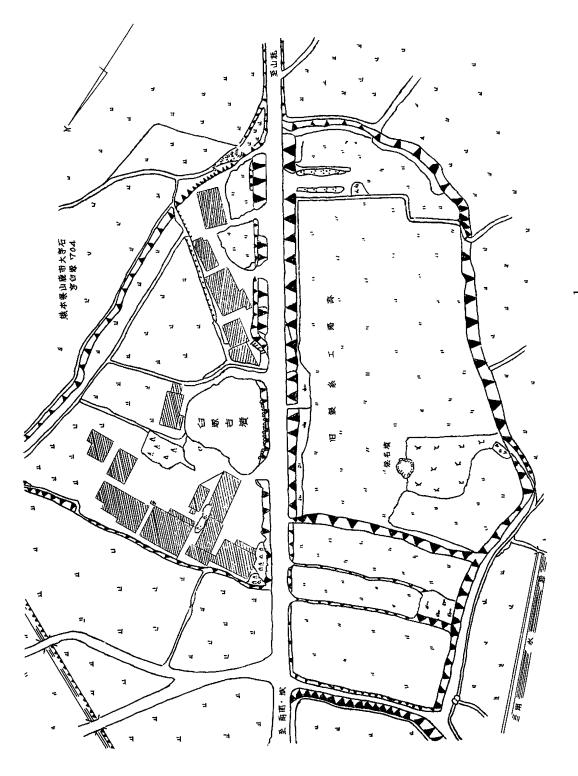
ある。横穴石室墳の発顕は5世紀に溯って不都合 ではない。熊本市坪井川下流の千金甲(乙)墳の ような長い羨道の奥に板石を煉瓦積みにした丸天 井の石室を築き奥正面に支石墓状の棺槨を設けた ものは、その前期の横穴石室墳である上益城大 塚(#17) や熊本市稲荷山は石室の構造を千金甲(乙) 墳に親近し玄室内部に厨子型棺と箱式棺とをコの 字型に設けていて複合形式は進んでいる。飽託釜 尾は玄室の前に1区を設けて複室となり玉名市繁 根木(伝佐山)も同類である。繁根木(#18)の横穴石 室の封土には長持型石棺を納められていて素環頭 太刀や鉄鉾など5世紀中期の副葬品をもっていた。 船型石棺や家型石棺をつくった凝灰岩加工の技術 が横穴石室築造に応用されてくると棺槨や羨門部 など主要な所にこうした切石が用いられるがその 他の石室の側壁積石には割ったままの石で小口積 される。臼塚は正にこの時期に相当する。やがて 石室全部が精密な設計のもとに加工された石で組 立てられるようになると、臼塚対岸城丘陵のオブ サン古墳、菊水町中小路の穴観音古墳などのよう な壮大堅固な石室墳となるのである。この石室の 羨道は細長いものではなく堂々と外に向けて開い ている。鍋田や城、長岩などの凝灰岩の大岩崖に 穿たれた横穴墓の墓拡プランはこれらの横穴石室 と同じであって、羨門の外に描かれた三角連続文 や浮彫された人像、盾、矢筒、弓などの形象文様 は仰ぎみる墳墓の威容となるのである。即ち臼塚 は横穴石室墳の中期に編年され、その実年代を6 世紀前半に置いて大過あるまい。

注17 熊本歴史蹟名勝天然記念物調査報告

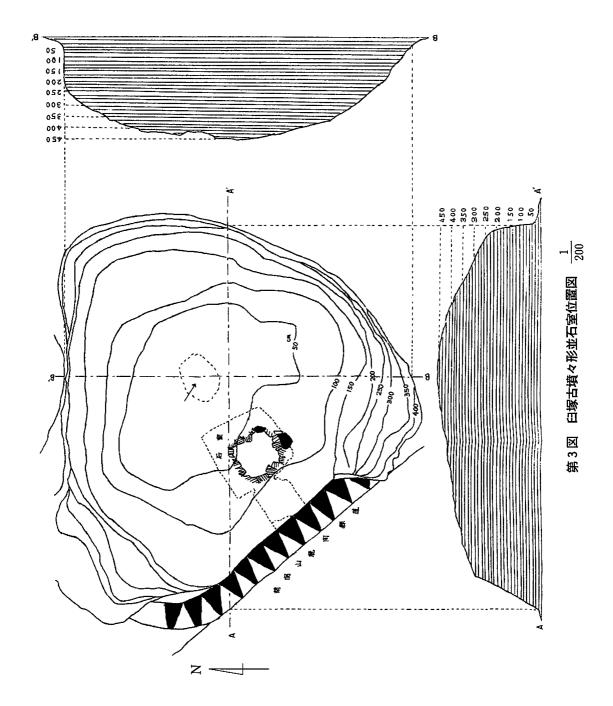
注18 右同報告書 石室は前室をもった横穴石室である が円封土中に長持型石棺を蔵し、素環頭の大刀など 年代を中期の前期に比定されるものが注目される。



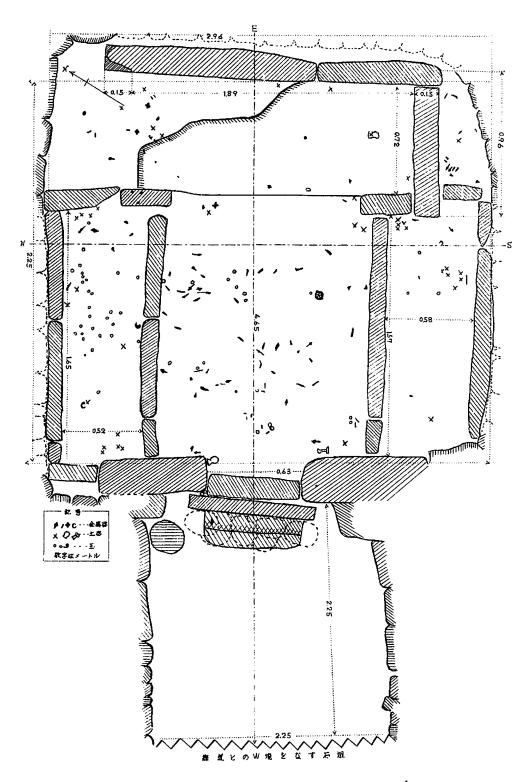
第1図 山鹿盆地北部地形図(1:60000)



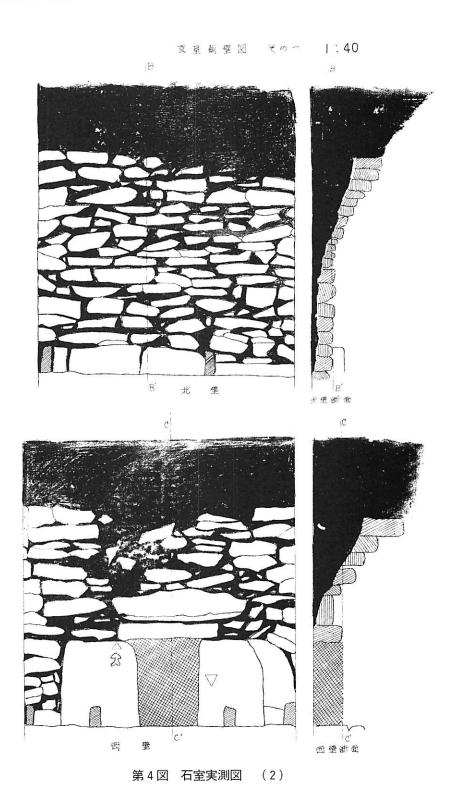
--- 49 ---



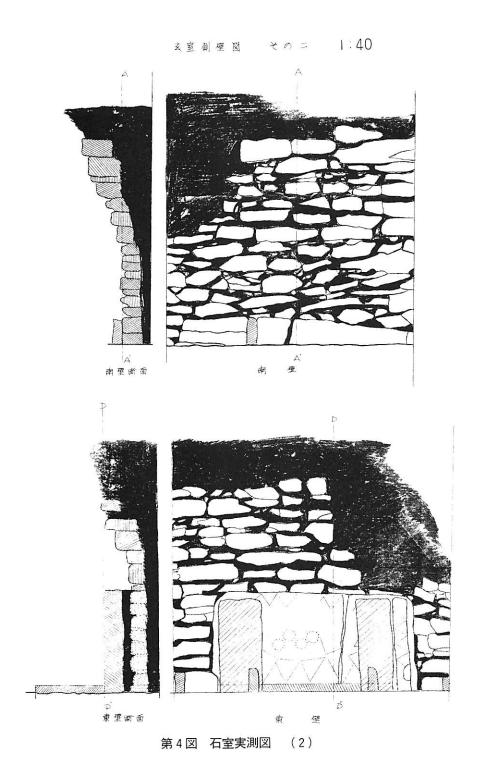
--- 50 ---



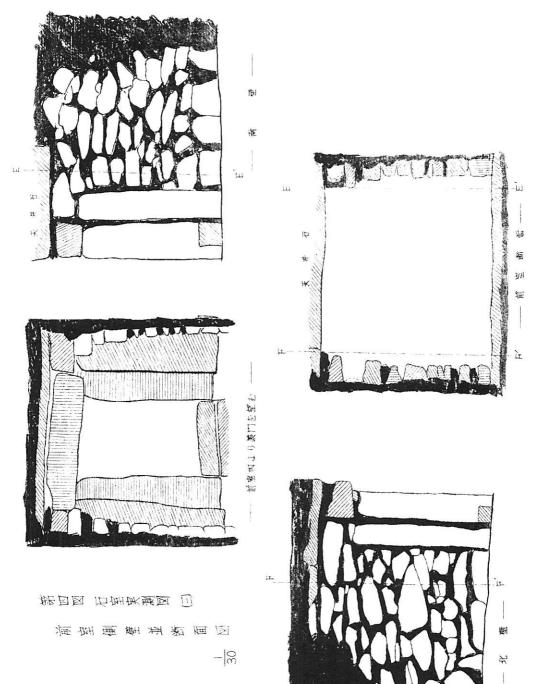
第4回 石室実測図 第一石室床面平面図並遺物配置図

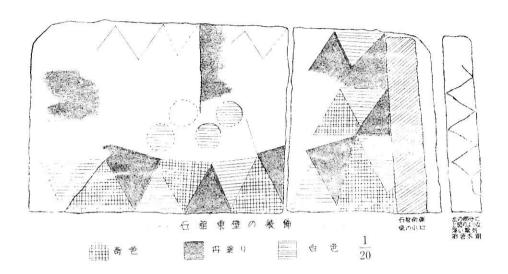


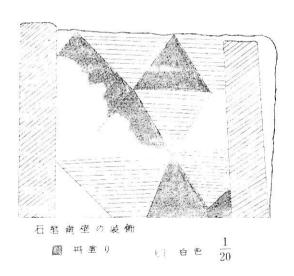
-52 -



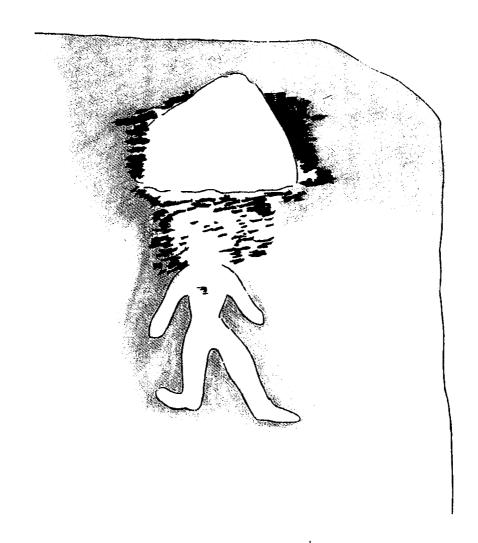
— 53 —



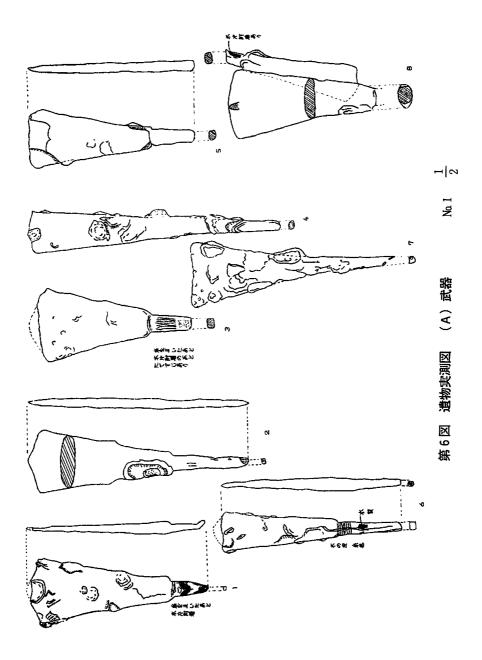


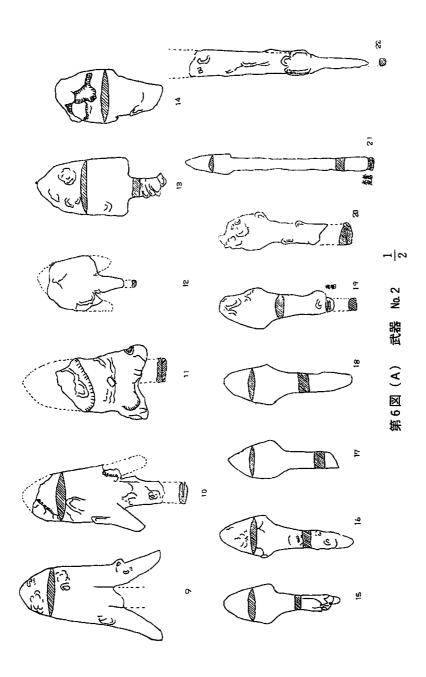


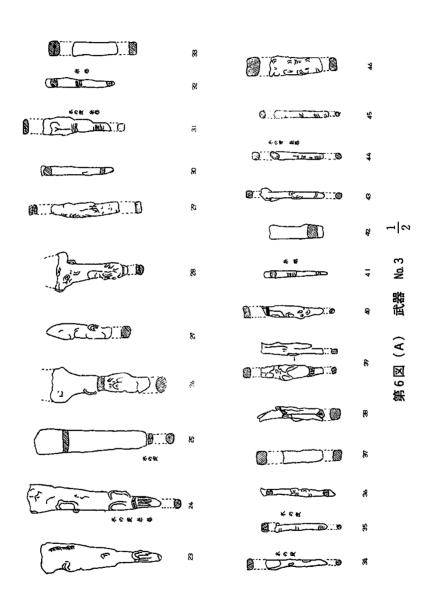
第5図 装飾文様(1) 厨子型石棺内壁

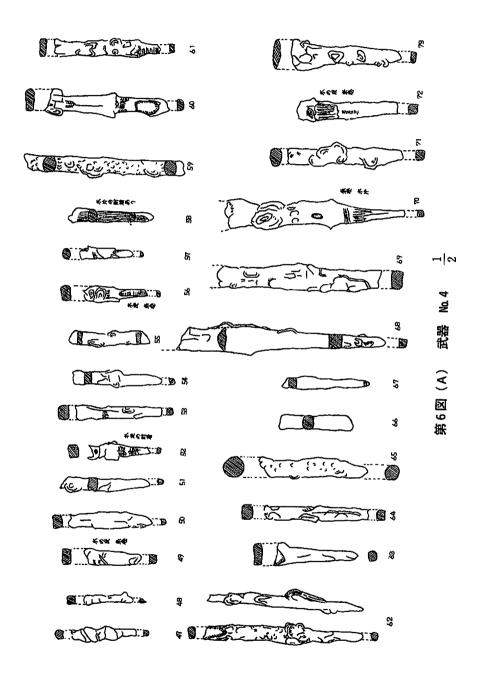


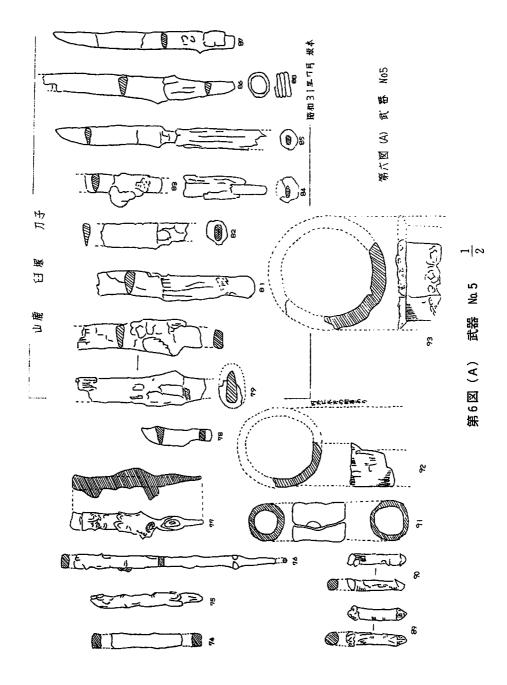
石室西壁 美门北袖石文旅 □ 円塗り 袖面全面に施す □ 白色 1/3

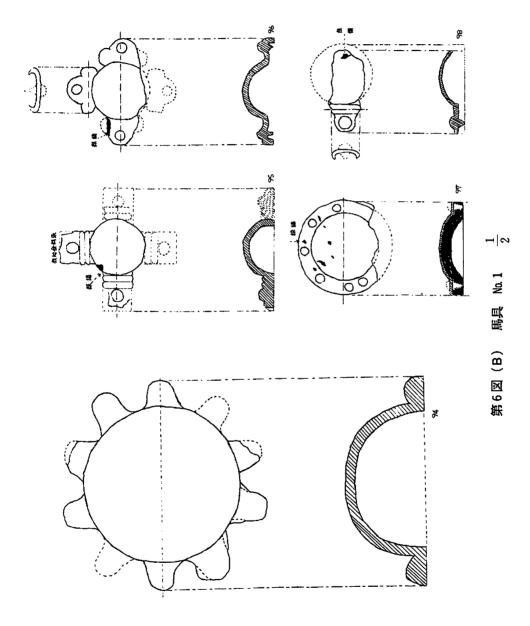


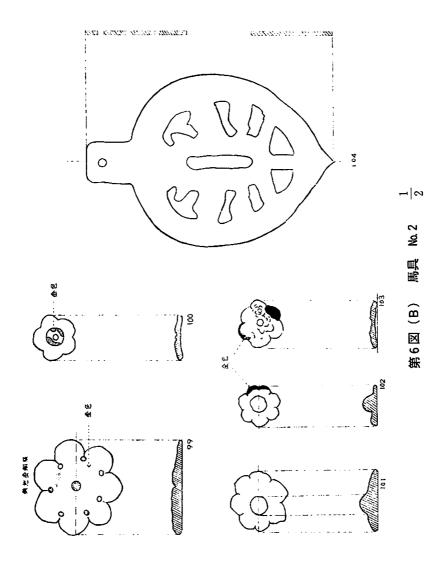


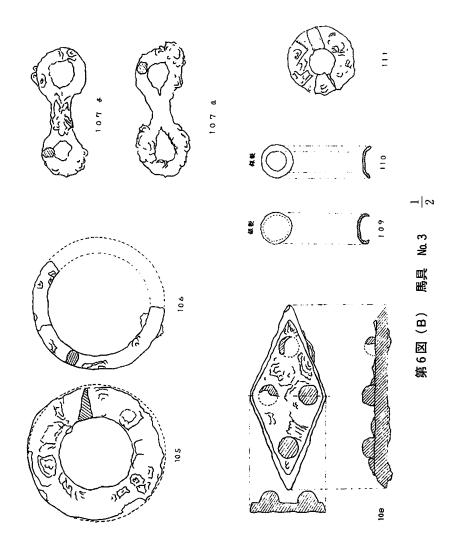


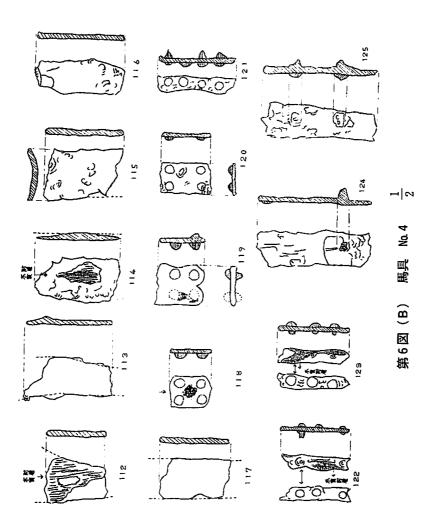


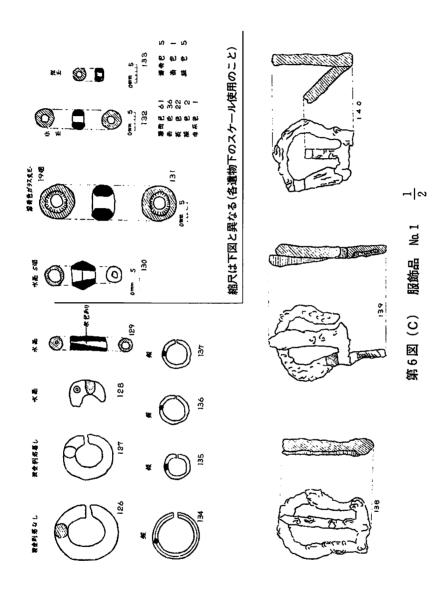


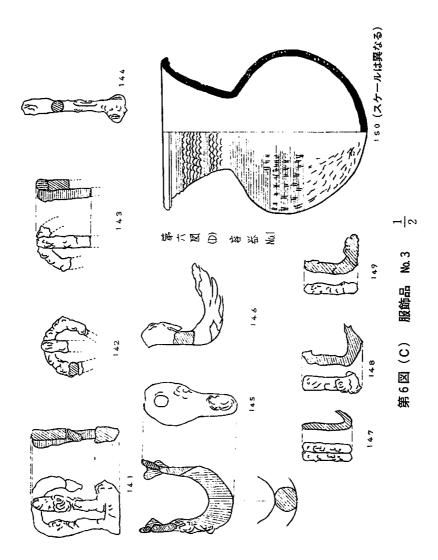


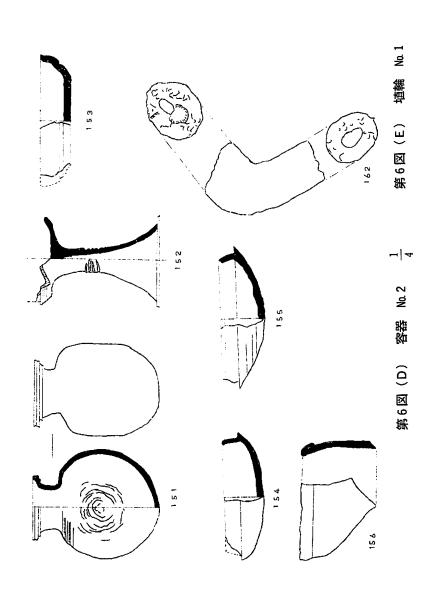


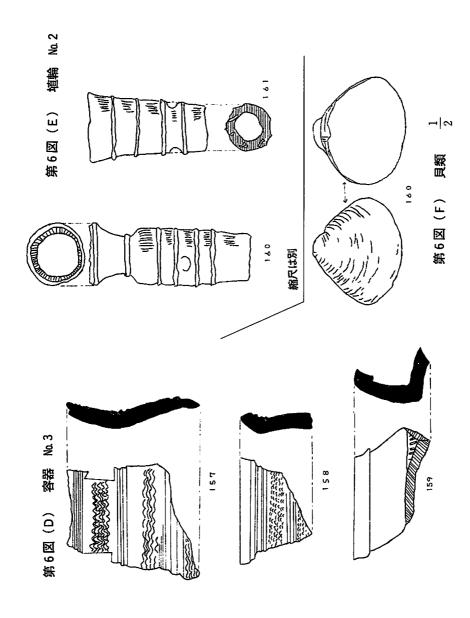


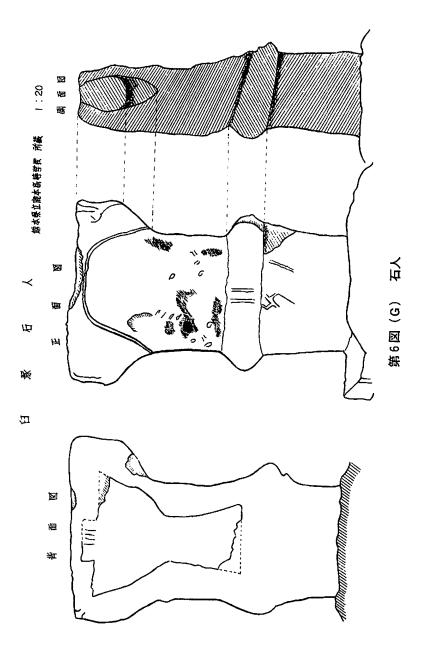


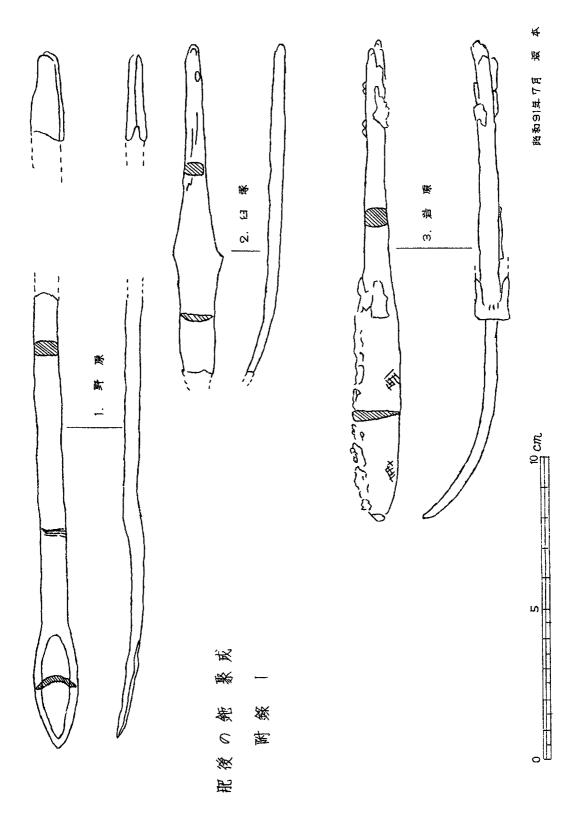












附録第2

臼塚古墳調査参加者名簿

- 1. 発掘責任者 熊本県立山鹿高等学校長 斎藤寿祐
- 2. 発掘担当者 熊本県文化財専門委員 坂本経尭 熊本県立山鹿高等学校考古学部教諭 原口長之
- 3. 参加者
 - 3 年 斎藤綽子(部長) 星子弘子(副部長)
 - 2 年 桑原憲彰 前田軍治 黒肥地章夫 角田主税 竹下浩正 鹿子木登美子 竹下孝子 坂本昌子 原 絹代
 - 1 年 水木敏照 寺本政親 三小田祐万 堀 正明 山口喜久八 牛川紀昭 益田洋子 下田美子 井上淳子

卒業生 隈 昭志 松本義照 阿蘇品保夫 近藤誠之助 吹原孝弘 松永敬護 広田静代 福田弘子

特別援助 佐賀大学々生 松岡 史 荒尾第四中学校 三島 格

4. 作業分担

- 1. 用度係 黒肥地 隈
- 2. 記錄係 角田 益田 広田 福田
- 3. 警備係 守下 水本 寺本 吹原
- 4.整理係 星子 阿蘇品 益田
- 5. 測量係 桑 原 三小田 堀 牛 川
- 6. 写真係 黒肥地 桑 原
- 7. 発掘係 1. 前 田 水 本 寺 本 松 本 山 口 2. 竹下(浩) 松 永 近 藤 水 本
- 8. 医療係 星子 原 下田
- 9. 庶務係 坂本(昌) 竹下(孝) 井 上 鹿子木

臼塚古墳石室関係写真(1)



石室右隅に残る盗掘坑跡



石室より羨道部をのぞむ



上部から見た石室のプラン



奥壁に沿って設けられた石屋形

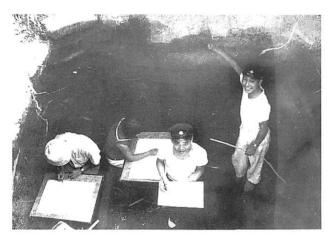


石室右側屍床

臼塚古墳石室関係写真(2)



石室左側屍床



石室内の実測風景



石室の石組の状況



見学者で賑合う調査現場



遺物整理班による遺物の水洗いと注記

熊本県山鹿市大字熊入

辨慶が穴古墳調査報告

原口長之

昭和31年7月

熊本県立山鹿高等学校考古学部

辨慶が穴古墳調査報告

1. 調査前の辨慶が穴古墳

大きな凝灰岩で構築された横穴式複室墳で南に 開口し羨門は埋没、楣石が露出し、楣石に続いて 天井部を構成する石材を失い、その欠落によって 生じた間隙から石室内に出入していた。

あまりにも大きな岩石をつかい二つも三つも部屋があるので、大男武蔵坊辨慶でも住んでいたのであろうというので何時の頃からか、辨慶が穴と呼びならされて来た。夏は涼しく冬は暖かく、住居としては、かっこうの場所として昔から浮浪者の住家となり、戦時中には飢餓と寒気のために幾人もの死者が発見された。石室内には墳前の墓所から墓石を持ち込み寝台状につみ重ね、そのかたわらには同じく墓石でかまどを作り、タナを設け、ワラ、むしろ等の腐植物が30糎あまりも堆積し汚物が散乱し、夥だしい蚊と蚤が湧いていた。長年にわたって石室内はまっくろくなって滲透する地下水のために膠状を呈し壁面にこびりついている。

鹿本郡誌に「……何時の頃に発掘せしか内部に 大なる切石を以て畳める石槨あり、俗に辨慶が穴 といふ、入口の左側に馬の壁画あり猶内部精探せ ば新発見すべきものあらん……」とあり、斉藤 忠博士は、その著「装飾古墳の研究」において、 その馬の像を紹介された。それで装飾文様がかつ て存在したこと、並びにその図柄がどのようなも のであったかについては知られていたが、前述の ような荒廃ぶりで内壁は真黒くなって居たので、 文様は既に消失し尽したものと思われていたもの である。

2. 調査の経過

①調査の動機

本校考古学部は、かねて菊池川流域の古墳について立地々形、墳形、開口して居れば、石室実測を行い古墳資料の集成を企図し昭和25年から逐次調査して既に7基を完了した。本年度は学校にも近く、既に開口していて而も横穴式二重複室墳であることなどから、本古墳を調査対象として選定した。これが本古墳調査の第1の動機である。

次に本年度も2学期を迎え、従来考古学部の中心として努力した3年生部員が、受験や就職準備に専念せざるを得ない時期になったので、2年生以下の部員に平板測量を始めとする各種技術を伝達、修練し、あわせて部員の親睦を計るというのが第2の動機であった。

このため7月23日から2泊3日の予定で山鹿市 大字石の公民館に合宿して本古墳の調査に従事す ることになった。

②調査の次第

○7月22日。晴天。

原口は部員桑原と共に石村の区長、婦人会長、 青年団長、山鹿市公民館主事を歴訪し、公民館使 用並びに辨慶が穴古墳の調査についての諒解と協 力を要請し快諾を得。亦、明23日よりの宿営につ いての諸準備をととのえた。

○7月23日。晴天。

8時半、全員24名、公民館到着。直ちに館内外 の清掃にかゝる。この1ヶ月1滴の降雨もなく、 いりつく暑熱で柿の葉もしぼんでいる。

部員を地形測量班、墳形実測班、石室実測班、 炊事班に編成し炊事班を残留して午后2時半、辨 慶が穴に出発現地に到着して、あまりにも荒廃し て居ることにびっくりした。石室をのぞいて見て、 石室内の実測など到底行われる状態でないことを 知り、予定を変更し班の編成を解いて全員をもっ て石室内の清掃に当ることにした。

義門は埋没して楣石が露出し、楣石の天井部に接する部分の石材が欠落して空隙が出来、その空隙から室内に出入していたが、室内の汚物を搬出するのに困難であるので、義門を開通することにした。附近の八幡小学校から鍬、ショウケなどを借用して午后4時から掘開作業をはじめた。午后7時半、薄明のなかに、やっと義門を開通し本日の作業を終了した。

○7月24日。晴天。

昨日に引続いて石室内の清掃。全く言語道断の 荒れようである。まず室内に約30糎も堆積してい る藁屑、筵落葉等の腐植物を羨門から搬出する。 室内にむれる悪臭、山蚊、蚤の襲撃に困難した。 慎重な注意をもって、側壁にそうて架設してある 寝台状の積石を検討した。側壁にきっちりと合わ せて施設されているので、稀有のことではあるが、 或は古墳築造当時の遺構ではないかと疑ったので ある。ここで内部の照明装置を必要と認め、電気 店に使を急派して200燭光2個を設備した。照明の もとに寝台状の積石を調べたところ、その石材は 墳前の墓所より墓石をもちこんで構築したもので あることが判明し室外に搬出した。

玄室内の厨子型石棺両袖石間にも敷居石らしく、 きっちりと切石をはめこんである。敷居石であろ うかと思い残存して居たが、あとで享保年間の刻 銘ある墓石であることがわかった。厨子型石棺内 には石地蔵1体、五輪塔の空風輪部が腐植土のな かにころがって発見された。

午後4時、休憩時に原口が「入口の左側の壁に 馬の文様があったそうだが、すっかり消失して惜 しい事をしたものだ。斉藤博士の装飾古墳の研究 という著書の中に、その文様を紹介してあるが、 その図が残っているだけだ」と愚痴まじりに洩した処、「それなら水洗いして見よう」という事になって、石室から15.6米も低い八幡保育園から水を提げて来て噴霧器で洗った処、思いがけなくも斉藤博士紹介されるところの馬の文様が浮びあがり、更にその馬がゴンドラ型の舟に積んだ図柄であることが判明した。元気づいた部員は更に水洗いを続行、第2義門東袖石南面に白、青、朱の3色を使用した幾何文様を発見した。

午後7時半作業中止、夜、石村の村人の参集を 得て「菊池川流域の古墳をたづねて」という本校 考古学部製作の幻燈を映写し、文化財の保護につ いて説明するところがあった。

○7月25日。晴天。

相変らずの酷暑である。予定の如く午前8時、 現地に到着。原口は途中八幡小学校に赴き、6年 生男子約50名の労力提供方を依頼快諾を得た。石 室内より搬出した汚物堆土が墓所を汚損している ので、整地美化するためである。

作業班を2班に分け、桑原班は立地々形測量、 前田班は昨日につづいて前室側壁の水洗、黒肥地 班は墓所の整理美化を担当した。

前室側壁の水洗によって後述するような装飾文 様を次々に発見した。

原口はこれが重要なる発見であることを知り、これが宣伝さるれば附近の学童、心なき見物人などのため損傷されることを恐れ、部員に暫くの間、他に口外しないよう注意を与えた。午後石室床面図を作製。仕事はまだ終了しないけれども、予定のとおり一応本日をもって合宿訓練を終了することとし午後6時より公民館内外の清掃をなし午后8時、解散した。

○7月26日。晴天。

桑原始め10名をもって昨日の仕事の残りを続け

る。断面図作製のため石棺の屋蓋の上にのぼり側 壁構築の状況を調査して居た処、石棺の屋蓋と玄 室北側壁の接着部から鉄鏃、倒卵形鍔、刀子片、 雲珠などを発見した。

墳形、立地々形の測量は終了しなかったが原口は7月30日より講習会出席のため上京しなければならぬのでその準備もあり一応、本日をもって調査を終了、残りの仕事は8月下旬に完了することとして解散した。

○後記

原口は県へ「辨慶が穴清掃調査報告書」を提出すると共に熊本県文化財専門委員坂本経堯氏に装飾文様の概要、舟の絵を伴うものであることを内報し、7月30日上京、8月20日帰校した。その間、坂本委員の案内で、東大教授駒井和愛博士の視察があり、本古墳の文様並に駒井教授の談話が諸新聞に大きく報道せられ、殊に西日本新聞は夕刊1頁を費した。以来、本古墳は世人の注目を浴びるに至った。

3. 遺跡

①古墳の位置

位 置 熊本県山鹿市大字熊入1109(官有地) 立地状態 地理調査所5万分の1山鹿図幅で言え ば図幅の東端より12・4糎、南端より5・2糎の 点に当り山鹿——久留米——福岡を通ずる第2号 国道を山鹿温泉より北へ1500米行けば右手の標高 40米、平野面との比高20米の台地上に立地する。

山鹿隈府盆地は掌を東に向ってひろげたように 岩野川、内田川、木野川、迫間川、合志川の5大 支流によって形成せられた5つの肢節部を有して いるが、その有力な1肢節として半月形に北方に 伸びる岩野川流域平野の東縁を限るのが、この古 墳の立地する熊入台地である。

熊入台地は鹿本北部の山岳地帯の主峰たる標高

416米の霞岳が緩かに南に延びて平野面へ舌状に 突出したもので、この台地によって岩野川平野と 吉田川平野を分けている。

塚の上に立って西南の方を望むと往昔の茂賀の 浦の沃野が一望のもとに展開して、古代遺族なら ずとも墳墓築造の地としてさぞかし快哉であろう と思われる景観である。

この古墳周辺の古代文化を概観すると、西の方、 岩野川平野をへだてた平小城台地には石人を伴い 横穴式石室内に厨子型石棺を備え棺壁に赤、白、 青で円文、菱形、王冠をつけた人物像などの装飾 を有する指定史蹟チブサン古墳がある。八幡、平 小城両台地にはさまれた沖積低地には、これも石 人を随伴し赤、白、青の幾何文様並に人物像を有 する装飾古墳、臼塚があり平小城台地が岩野川低 地にのぞむ凝灰岩の崖には、人物像、弓、靱、靹、 刀子などの彫刻を有する指定史蹟鍋田横穴群があ る。この外、楯と人物像を浮彫する長岩横穴群、 人物像をもつ城横穴群まだ調査未了であるが津袋 御霊塚には靱、靹の文様がある。以上の数例を見 ただけでも、この地域に特異な意匠をもった装飾 古墳を主体とする一文化圏が構成されていること を認めなければならない。この文化相に更に新し いデータを加えたのが辨慶が穴古墳である。

②墳形

記録によれば「前方後円式なるが如し」とある。 立地々形図を熟視すると前方部の遺構と思われる 崖があることに気付かれる。併し現在の封土の南 方部に江戸時代から墓地が営まれた結果、著しい 変容を受けている。

現在の封土は P95に示すように円形を基本形と するが北東と南西の部位を削除せられ北東の部位 は崖となり、南西の部位は石室の天井部が落下し 開口したために生じた決壊である。

封土の基底面は最長部で15米あるが、この封土

の北から東にめぐって恐らくは封土の原形を残存せる畦畔がある。この畦畔はそのまま封土の北から西にまわる崖線に続いている。第2図において破線をもって示めせる部分である。封土の高さは5米70糎あって墳頂は平坦になっている。

封土の西側、崖状に削剝された部位に、台地の 地肌の上に、褐色土と黒色土を交互に積み重ねて 封土を形成してあるのが明瞭に看取され、その盛 土の中に土師器の破片がある。

③石室

石室の記述に先だって本報告書で使用する石室 各部の呼称について次の様に規定して置きたい。

表門は南から第1、第2 表門とよび袖石はこれに東西を冠し、例えば第1 表門東袖石などの如く呼称する。側壁は前室、玄室ごとに東西南北を加え例えば前室東側壁とする。但し羨門部については、例えば前室北壁は第2 羨門東袖石南面、第2 羨門西袖石南面のように袖石毎に南面、北面の語をつけて使用する。石棺は玄室に造りつけであるので、玄室の項目におさめ、石棺の袖石も羨門の場合に準じて、石棺東袖石、石棺西袖石と呼称、棺蓋は屋根型になっているので屋蓋と呼称した。

当地方に多産する凝灰岩の巨石を使用して構築 した横穴式複室墳で南33・5度西に開口する。羨 道、第1羨門、前室、第2羨門、玄室に区分され るが羨道の部分は近世以降、其処に墓地が営まれ たために破壊され第1羨門に接する部位に僅かに 其の遺構を認め得るに過ぎない。

方向は南33・5度西

主軸の長さは基底部において玄室奥壁=厨子型 石棺内壁より第1義門の外壁まで6米30糎ある。

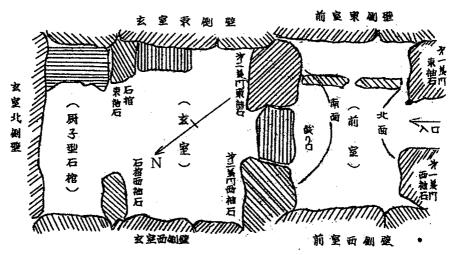
(1)玄室

玄室の幅は、北壁の部分で2米75糎。奥行は 主軸上で3米45糎のほぼ矩形をしている。

○厨子型石棺

北壁より主軸上1米の場所に約35糎の袖石を 東西の両側にたてて玄室内を区分しその上に 280cm×136cm以上の面積をもつ大きな板石を 架して屋根とする。但しこの板石は両袖石によ って支えられているのではなくて、その両端は 側壁の中に突込み、側壁構築の1石材としての 役目を果している。

板石の下面は平坦であるが上面は僅かに合掌 形をなし明瞭な棟の造り出しがあり切妻の屋根



第1図 本報告書で使用する石室各部の呼称説明図(上図は石室床面をあらわす 1:60)

を意識して構築したものであることがわかる。

側壁をそのまま石棺の棺壁としているので一 見した処、玄室とは別に一室を構成しているよ うに見え本古墳が三重石室墳であるかのような 印象を与える。

○側壁

北壁及び東、西壁はいづれも縦1米70糎 横 1米30糎内外の大きな板石をたてて、その上部 に不規則な切石又は塊石を持送り式に内部に積 み出し天井部が縮約したところで1枚の巨大な 板石をもってふさぎ天井とする。

石棺内壁を構成する側壁はいづれも1板石で 充分なる削平が加えられている。玄室北壁=石 棺北壁の石材は横2米75糎、縦1米50糎に及ぶ 壮大なもので僅かに前方に傾いている。

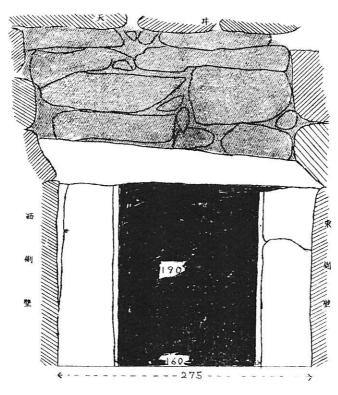
○床面

厨子型石棺の床面には板石を敷いてあったものと思われ、現在その一部が残存し、北壁の板石に敷石を架するための約3糎の切り込みがある。

玄室の石棺外の床面には恐らくは東、西両壁沿いに敷石屍床が設けられて居たらしく、東壁沿いに敷いた板石が1枚残っている。この両屍床にはさまれた中央参道には本古墳の立地基盤たる自然土層の上面に径10糎内外のクリ石をならべ赤土で叩き固めてあったと思われ第2美門附近にその一部を残存する。

(2)第2 羨門

東袖石は基底部において幅1米、厚さ74糎。 高さ1米59糎。



第2図 厨子型石棺正面実測図

 $\frac{1}{40}$

西袖石は基底部において幅1米、厚さ82糎。 高さ1米55糎。

西袖石共にその上端、截り口前室側の部分に 20cm×15cm 位の切り欠きがある。東袖石には 2 段の切り欠をもっている。羨門の蓋石を受けるために木材でも架したものであろうか。

両袖石の截り口前室側に夫々14cm×13cm× 159cm 及び13cm×11cm×155cm の截り欠があって羨門蓋石を受ける様になっている。

後に述べるように両袖石の切口及び前室側の 壁面に装飾文様がある。

(3)前室

奥行は主軸上で2米25糎、幅は北壁ぞいに2 米68糎、南壁ぞいに2米60糎で多少、いびつに なっているが矩形を基本形とする。

側壁の状態は玄室と同じく東、西壁は横1米30糎、縦1米内外の大きな板石をたてて、その上に幅40糎内外の切石を重ね天井石を受けている。天井石は第2湊門楣石の上に重ねられた石板がそのまま前室にのびたもので、天井部の大半をふさいでいる。この板石で足りない天井の

部分は形状不規則な切石を相互に持たせかけて ふさいである。その持たせかけた石材の1つが 陥落して空隙となり、この石室の出入口となっ て居た。

北壁は前述の第2 羨門をなし、南壁は第1 羨 門となる。

床面は擾乱されつくしていたので確認できなかった。東側壁沿いに側壁から約50糎の間隔をおいて長方形の障壁を作っている。屍床である。 西壁沿いには発見出来ない。

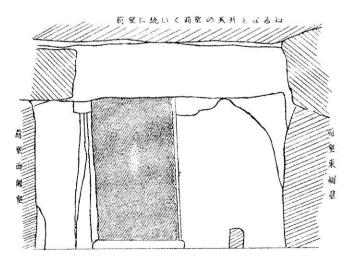
後述する如く、前室側壁の板石壁面に全面的 に装飾文様がある。

(4)第1 羨門

東袖石は横88糎、高さ1米75糎、厚さは基底 部で50糎。西袖石は基底部で横85糎、高さ1米 64糎、厚さ65糎の矩形状の板石である。

この両袖石をたてて、その上にカマボコ型の 底面の幅約85糎の切石を架して楣石とする。

楣石は西袖石で折れてその一端が僅かに西袖石にかかっている。調査以前にはこの楣石まで埋没し楣石上の天井石が落下して生じた空隙か



第3図 第2羨門実測図(南面)

 $\frac{1}{40}$

ら石室内部へ階段状に墓石を積み出入して居た ものである。この袖石の外側(南面)にも装飾 文様があったらしく朱色の痕跡がある。

4. 装飾文様

装飾文様は恐らくは石室内壁全面に施されて居たものと考えられるが、玄室においては既に述べたように壁面に煤が膠状にこびりついているので文様が判明せず石棺北壁、石棺東袖石截り口などに赤色が文様らしい形状をもって看取されるに過ぎない。将来何等かの科学的方法によって処理さるれば或はその文様の全貌が判明するかも知れない。

文様が看取されるのは第2 羨門及び前室側壁である。第5 図における①~⑧の番号は文様の所在する側壁の位置を示したものである。

①第2 羨門西袖石截り口の文様。

鹿本郡誌に「入口の左側に馬の壁画あり」とされ斉藤忠博士によって紹介された馬の壁画はこの部分にある。

第6図において馬の下方に描かれた船やその下 の赤、白の文様は今回の発見にかかるものである。 凝灰岩の地肌に赤と白で描く。

②第2 羨門西袖石の文様

両袖石截り口、前室に面した部分を羨門蓋石を 受けるために切り欠いてある。この切り欠きの部 分に赤で馬にのった人物が小さく描かれている。

羨門に蓋石をもってふさぐと当然この絵は見えなくなる。

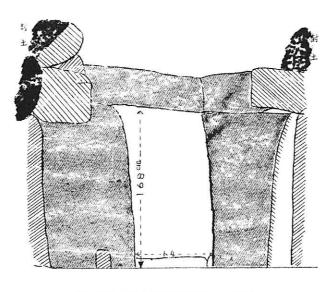
③前室西側壁の文様

不明瞭で壁面を濡せば辛うじて判別出来る程度 である。地肌に赤で描く。この部分も煤が膠状に こびりついているので将来、科学的方法が考えら れたら全容が出るものと思われる。

④第1 羨門西袖石北面の文様

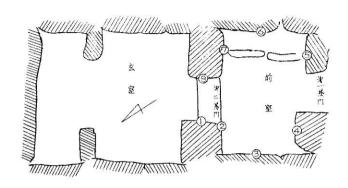
不明瞭。径14糎の赤の円文を中心として幅4糎の青色、次にその外側に幅13糎の白色、更にその外側を5.5糎の青色が同心円状にめぐっている。但し青色。

⑤第1 羨門東袖石北面の文様



第4図 第1羨門実測図(北面)

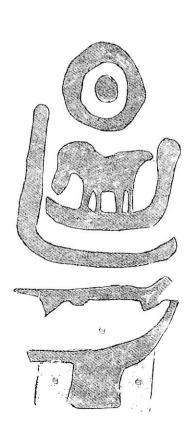
 $\frac{1}{40}$



第5図 装飾文様の存在する位置を示す図

(左図は石室床面図で文様は左図で番号を附した場所の側壁に存在する)

 $\frac{1}{40}$



第6図 第2羨門西袖石截り口文様



第7図 第2羨門西袖石文様



以下装飾支援は続て同じ





第9回 第2羨門西袖石北面

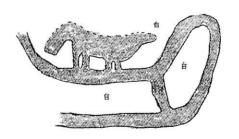
 $\frac{1}{15}$

 $\frac{1}{15}$



第8図 前室西側壁文様





第10図 第1 羨門東袖石北面文様

赤と白でゴンドラ型の舟に馬を積んだ文様であ しきものがあって鳥が1羽とまっている。但し岩 る。馬の図がやや不明瞭である。馬の上方にも、 1部が残存しているが判別出来ない。

⑥前室東側壁文様

ゴンドラ型の船が2隻ある。上の船には屋形ら

石表面の風化による剝落のため鳥の全容は判明し 船の下方にも何等かの文様があったらしく文様の ない。下の船には馬を積んでいる。何れも鮮明で 大胆な筆法をもっている。

⑦第2 羨門東袖石南面の文様

まず壁面の全面に白色を塗り地色とし、その上

熊本県立装飾古墳館研究紀要

に赤と青で幾何文様を描いている。従って第12図 で白色とある部分は地色をそのまま生かしたもの である。青色は臼塚古墳やチブサン古墳の青色と 異なって濁った藍色を厚く油絵具式に厚く盛りあ げている。青色という表現は適当でないが一応、 この表現を使用した。

⑧第2 羨門東袖石截り口の文様

不明瞭で水で濡せばかろうじて判別出来る程度、 岩肌に直接、赤と白で描いてある。船の下方にあ

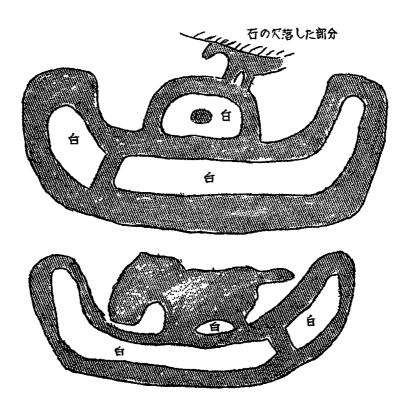
かの文様が消失して1部が残存したものである。

○顔 料

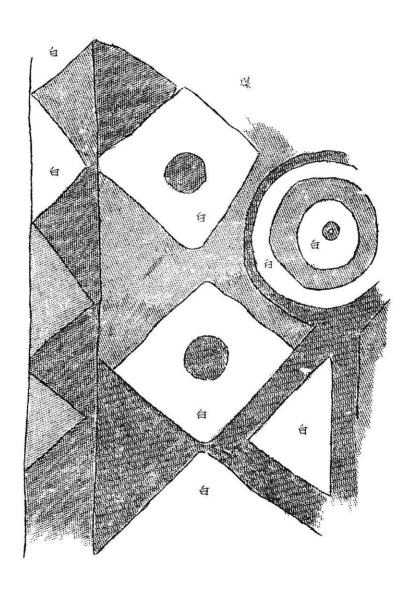
本古墳の装飾文様に使用された顔料については 未調査である。名古屋大学山崎一雄教授の御指導 を仰ぐ予定である。

5. 遺物

遺物は玄室内、厨子型石棺の屋根の斜面が北側 壁と交わる凹所に発見された。遺物の出土状態は る靭のような文様は靭を意図したものでなく、何 第14図の通りで原位置を保っているとは言い難い。

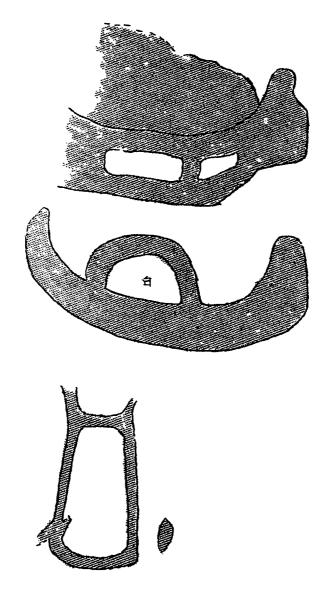


第11図 前室東側壁文様



第12図 第2 羨門東袖石南面文様

 $\frac{1}{10}$



第13図 第2 羨門東袖石截り口文様

 $\frac{1}{10}$

遺物は武器、服飾品、馬具、に分ける。

1)武器

武器には鏃、鍔、刀子らしき断面を有する鉄片が3個あるが腐蝕著しく確認困難である。

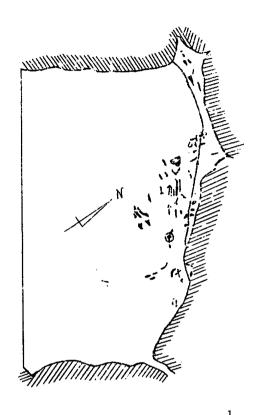
○鉄 鏃

全部有茎式である。身幅が著しく広く、薄く鎬のない、祭祀用として使用されたと思われる所謂儀器に属するものが3個ある。その代表例として第

5図①をあげた。

身幅がせまく肉厚く尖根の実用鏃に属し刃部を有するものが7個、いづれも箆代が長く奈良時代式の鏃に類している。その代表例として第5図②をあげた。

他はいづれも破片で鏃の箆代の部分が多い。そ の中で箆代を竹の箆に挿入し竹の上から糸をちみ つに巻きつけ更にその上を桜の皮で巻いたものが



第14図 遺物出土状況 $\frac{1}{50}$

15例ある。この地方における箆代装着の1方法が推察される。

○鍔

長径8糎6粍、短径6糎7粍、厚さ5粍。鉄製 で透しはない。棺蓋上、鉄鏃の下に鉄鏃と重なっ て発見された。

○其の他

用途不明のものとして第6図④がある。釶状に 刀尖が上に反っているが釶とするには小型に過ぎ るし、鏃としては刀尖の反りが気がかりであるの で一応用途不明としてここにあげた。

②服 装 品

長径2.2糎、短径1.8糎、鐶体の断面は楕円形を している。

③馬 具

雲珠、飾金具がある。

○雲 珠

2個。共に鉄地金銅張で両者とも1部に金色を 残している。両者とも全く同様の製作方法を取り 半球の主体部から四方に出す脚部はよく均整がと れ精巧な感じである。半球部のつまみの足には恐 らくは革具であろうと思われる裏当があるなど巧 緻である。

○飾 金 具

幅1糎6粍、厚さ3粍、鋲の頭と足をもった鉄板で金銅張りのあとが点々と残っている。革具、 鞍橋などの飾金具であったろうと思われ、幅や厚 さに多少の相違があるが同様な構造をもったもの が5片ある。

(第6図8)

○其の他

鉤具が2個、鉄環の破片が1個ある。

6. 考察

①境形について

既に述べたように本古墳の周辺に近世以降墓地が営まれた結果、墳形は著しい変容を受けているが、立地々形を精査すれば前方部の遺構と思われる崖線があり前方後円墳と見て差し支えないと考える。この崖線を前方部とすれば主軸の長さ約66米、前方部先端の幅21米となる。

後円部の封土をめぐって存在する畦畔と封土の 北から西めぐる崖線をつらねると恐らくは、これ が封土の原型を示すものではないかと推定される。 現在、封土の裾は崖状をしているが、この裾を墳 頂から自然な形で円墳状に延ばしていけばその末 端がこの崖に達することからも、このことは言え ようと思う。とすれば後円部の直径は27米となる。

こう考えるて来ると本古墳は主軸の長さ約66米、 後円部の直径27米の隆然たる前方後円墳で、岩野 川流域平野に王者の権威を誇示していたことが想像される。

②石室構造について

石室構造上、まず注意せられることは、玄室の 奥正面に厨子型石棺をそなえ、左右に恐らくは屍 床を有して居たであろうと思われることである。 本古墳の西方、平小城台地のチブサン古墳、本古 墳の眼下に見ゆる臼塚古墳も同様な構造を有し、 熊本千金甲甲、飽託釜尾古墳などと共に肥後にお ける横穴石室墳の顕著な特色をなしている。

次に厨子型石棺は明らかに山鹿チブサン古墳、 臼塚古墳のそれにつながるものである。チブサン、 臼塚においては別個に作製した石棺を玄室にすえ たものであるが本古墳では大きな板石を壁から壁 に架けわたして造りつけとし床面と屋蓋の間に袖 石をはめこんで玄室を区切って居て、チブサン築 造当時の厨子型石棺についての観念は相当変化し ている。にもかかわらず屋蓋の背に棟を作り出し チブサンの伝統を温存して居る点に注意される。

第3に本古墳に使用した石材の大きさ、石組みの豪壮さである。オブサン古墳に親近しているがより豪壮である。坂本経堯氏によれば当地方古墳 編年の資料として重要である。

③石室の装飾文様について

一般的に装飾文様の解釈について意見によると 先学によって次の様な解釈例が示されているよう である。

- ①墳墓の装飾美化のために施されたものである。
- ②死者生前の生活を描いたものである。
- ③文様は死者への供献の意味をもつものである。
- ④墓室に外来者や悪霊の侵入を防ぎ、その神聖 さを保持せんとする呪禁の意を有する。
- ⑤死者葬送の図を描いたものである。いわゆる 「天の鳥船」の思想もこの1つ。

以上、先学によってなされた一般的な解釈を列

挙した。本古墳についても、これが新聞で報道されて以来、視察者が多く各種の解釈が述べられているが、決定論は将来に俟つべきであろう。

顔料については調査されていないが、名古屋大学山崎一雄教授は「装飾古墳の顔料の化学的研究」(注)において山崎教授の調査された40例について述べられ、赤色顔料は九州の古墳のものはすべて酸化鉄を主とするもので、これらは鉄を多く含有する粘土のごときものを焼いて製したものであり白色顔料は白色粘土であるとされている。本古墳の赤色、白色の顔料も恐らく同様なものであろうと考えられる。本古墳の青色顔料については山崎教授の前記論文中にも類似の調査例がないようである。

註1. 古文化財の科学第2号、山崎一雄「装飾古墳の顔 料の化学的研究」

④遺物について

遺物が棺蓋上に発見せられたことは斂葬時に石棺の屋蓋上、珠に本例における如く殆ど天井に近い高さを有する屋上に馬具、太刀の類をおいたものかどうか、或は後世、開口の節、屋上に投げあげられたものかどうか、断定出来ない。出土品のうち倒卵形鍔は肥後においては出土例が少ない。鉄鏃が所謂、奈良時代式の鏃の範疇に属するもののように長い箆代を持つことは本古墳の編年上注意されねばならない。

⑤辨慶が穴古墳の年代観

山鹿盆地周辺における古墳群の系列を概括すると

(イ)古墳文化に先行するものとして平小城台地の 川辺、盆地底の南島、千田台地の広、蒲生台 地の御宇田、十三部台地の長沖甕棺群がある。 (ロ)古墳時代の前期から中期に属する舟形石棺が

平小城台地西牧、日の岡山麓津袋にある。

(ハ)古墳時代の最盛期たる中期に所属する岩原古

墳群、これに続く大道古墳群

(二)後期の所産たるチブサン、オブサン、臼塚、 金屋塚、辨慶が穴、河童塚、御霊塚、乳母塚。 (対後期から終末期にかけての鍋田、長岩、蒲生、 米野岳横穴群。

とおおよその系列はつかみ得るものの、右の後期古墳群における各古墳相互の前後関係はどうであろうかという事が問題であった。これを解明するために必要な手掛かりとなる遺物が乏しい現在、いきおい石室構築上の特徴によらざるを得ないが坂本経堯氏によれば、不規則な板状石の小口積みになる側壁をもつものは巨石使用の側壁をもつものより古い。とすればこの古墳は、板状石の小口積み手法をとるチブサン、臼塚より、小口積みと巨石併用手法をとる馬塚古墳に続くものでオブサン古墳とほぼ同時期に位置し、古墳時代後期中葉に比定して如何であろうか。

以上、極めて粗雑なものであるが、史跡指定の 書類提出時期にせかれて狭い見解を述べた。

おわりに

10月10日頃であったろうか。県文化財専門委員 坂本経堯先生が来校されて文化財保護委員会の斉 藤忠博士が辨慶が穴古墳の調査に来能されるとの 御連絡があり、追って山鹿市が史跡指定の手続き をされるから、それに添付するために早急に報告 書を作成するようとの御指示があり、このことは 10月26日開催される予定の県文化財専門委員会の 審議に間に合わせたいとのことであった。

実測図を始めとする記録の準備はあったがいざ 提出となると不備な点ばかりで、文字通り昼夜兼 行で整理したけれども粗雑なものになってしまっ た。殊に「考察」は先学の業蹟を参照する暇もな く充分なる手続きが踏まれず狭少、粗雑なものと なってしまい、内心忸怩たるものがある。本報告 書が装飾文様の発見を主とするものであるから、 発見にいたる調査の経過、発見された装飾文様の 記述に重点を置いた。

山鹿高校新聞第56号は「辨慶が穴古墳調査報告」 の特集であるが、報告書のなかで考古学部長桑原 憲彰君が

○7月25日(前略)昨日に続いて壁面の水洗作業。遂に素晴らしい絵画をみつけた。それが有名な舟を中心とする文様である。

「えらいことになった」と原口先生がつぶやい て考えておられる。

と書いているが私の実感である。併し「えらいことになった」このよろこびは辨慶が穴から20米もの坂をバケツで水を提げて来て働いた考古学部員の努力に負うものである。何を命じても悦んで誠実に働く部員に改めて敬意を表したい。

史跡指定などでいろいろと事が大きくなるにつれて斉藤校長先生にまた思わぬ御世話をいたゞき、 乏しい学校の経費の中から何やかやと御迷惑をおかけした。いつにかわらぬ御温情にあつく御礼申 しあげたい。

本件に関する坂本経堯先生と西日本新聞社幸平和記者の御努力は高く評価されねばならない。本県古代文化の解明、文化財の保護、維持のために東奔西走の先生が、あのお忙しいなかから何度、山鹿へお出いただいたことか。亦、幸平和記者は平常古代文化解明に深い関心と造詣を有しておられるが本件についても職務をはなれて非常な御努力をいただいた。

日本古墳文化資料綜覧、装飾古墳の研究、その 他の高著を通じて尊敬していた斉藤忠博士のお出 を得て親しくいろいろと御教示を受けたことは何 物にも勝るよろこびであった。

最後に辨慶が穴古墳の保護施設その他について 種々御高配頂いた山鹿市当局並びに山鹿市教育委 員会及び教育委員長江上平助先生に敬意を表し本 稿を終る。

附 録

辨慶が穴古墳調査参加者名簿

1. 調査の主体 熊本県立山鹿高等学校考古学部

1. 調査担当者 熊本県立山鹿高等学校考古学部教諭 原口長之

1. 調査参加者

部長 桑原憲彰

部員・3年 前田軍治・黒肥地章夫・桑原憲彰・角田主税

竹下孝子・鹿子木登美子・坂本昌子

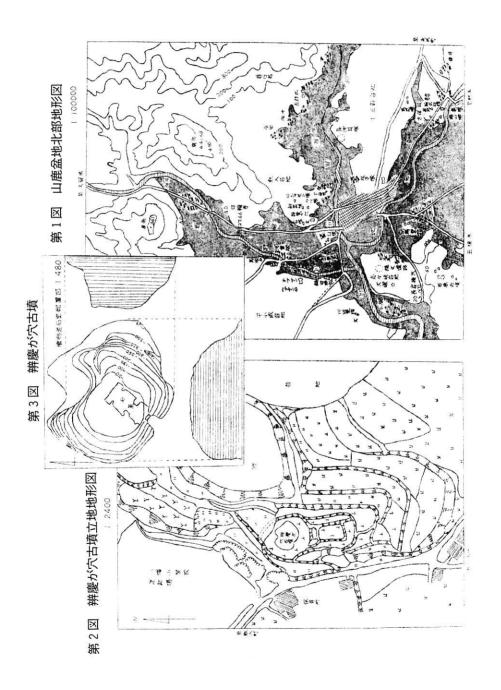
2年 寺本政親・阿蘇品陽之介・堀 正明・牛川紀明

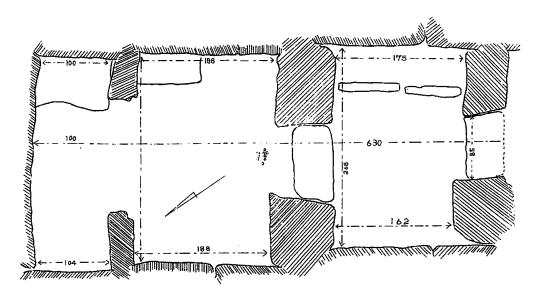
三小田祐万

1年 大林幸吉・山口敬助・富田金一・近藤公子

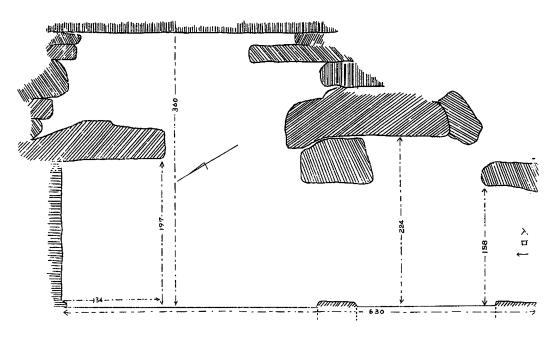
戸上 紘

卒業生 隈 昭志・星子弘子

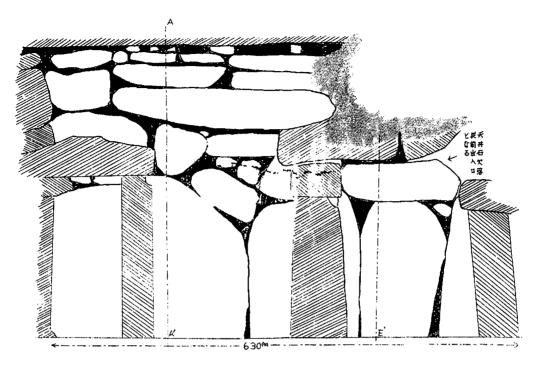




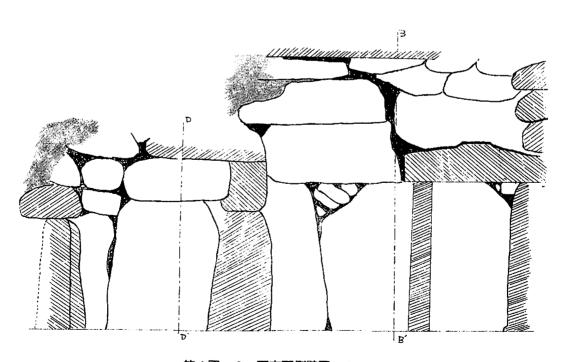
第4図 1 床面図 1:50



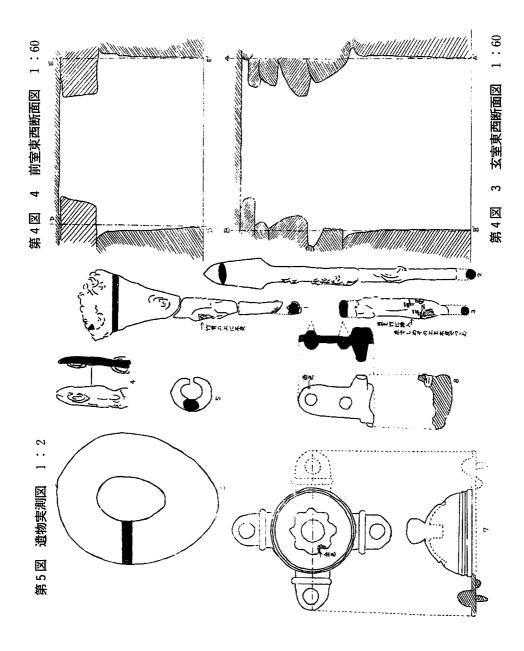
第4図 2 南北断面図(主軸にそって) 1:50



第4図 5 石室東側壁図 1:50



第4図 6 石室西側壁図 1:50



辨慶が穴古墳発掘調査関係写真(1)



辨慶が穴古墳墳丘(昭和31年当時)



弁慶が穴古墳入口部の状況 (左同)



石室内実測スタッフ



見学と手伝いに訪れた小学生



地形測量スタッフ

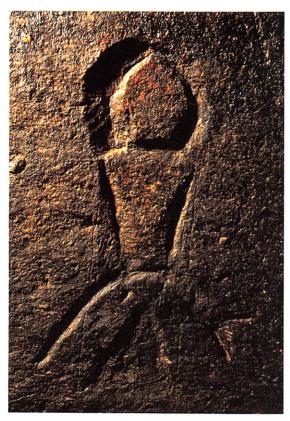


石公民館での合宿風景

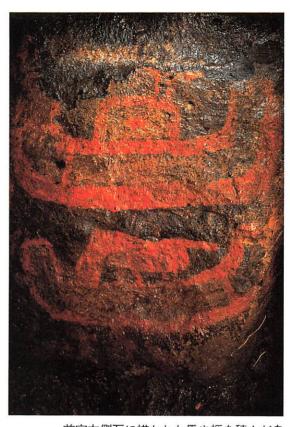


発掘担当スタッフ

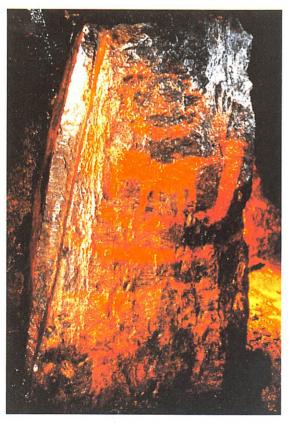
辨慶が穴古墳装飾文様関係写真(2)



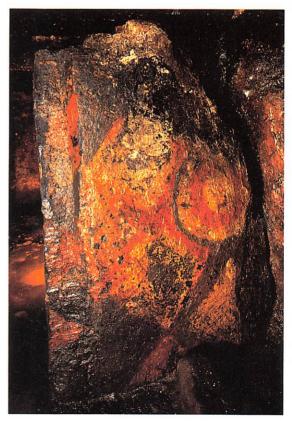
羨道部左側壁に彫られた石人



前室右側石に描かれた馬や柩を積んだ舟



舟と馬と太陽と(左袖石切口)



幾何学文様 (右袖石)

編集後記

この研究紀要に収めた三冊の報告書は、熊本県立装飾古墳館の初代館長であった原口長 之先生の執筆になる装飾古墳の調査報告である。

黄色く変色したガリ版刷りの、ワラ半紙の報告書と首っ引きで校正をしながら、40年前 の過ぎ去った時代を思う。まさに、昭和30年代当時は、県下の高校考古学部全盛の時代で あった。色褪せた報告書の行間に、私自身の青春時代も鮮やかに甦ってくる。

当時、古墳の発掘調査は、戦前の神話一色に彩られた歴史からの脱却であり、新しい科学的手法による歴史観確立の時期でもあった。郷土に所在する三基の装飾古墳の調査は、 当時、県下の多くの人々の熱い視線と興味を集めたものであった。

そして、その調査直後出版されたこれらの報告書は、いわば戦後の考古学報告書の古典 的な存在ともなった。その後、各高校の考古学部からは、幾多の考古学徒が巣立っていっ たが、その人達のなかにはこの三冊の報告書を、報告書執筆時の手本とした人も少なくな かった。

太平洋戦争の戦前と戦後とを比較して、考古学ほど長足の進歩を遂げた学問分野も少ないと思う。しかし、今、これらの報告書を読み返してみて、少しも古臭さを感じさせないのは不思議である。現在埋蔵文化財の発掘調査は、県・市町村が行う行政調査が主流となってしまったが、当時は、高校考古学部の学術的調査が中心であった。その時の自負と気負いのエネルギーが、報告書をして何時までも、その新鮮さを失わさせない秘密なのかもしれない。

かつて、この三つの装飾古墳の発掘調査に参加した一人として、今度の編集作業は、深 い感慨を覚えるひと時でもあった。

(副館長・桑原憲彰)

熊本県立装飾古墳館 研究紀要第2集

発行年月日 平成8年3月31日

編集•発行 熊本県立装飾古墳館

〒861-05

鹿本郡鹿央町岩原3085番地

印 刷 下田印刷

₹860

熊本市南熊本3丁目1-3



この電子書籍は、熊本県立装飾古墳館 研究紀要 第2集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。 底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、全国の歴史博物館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名:熊本県立装飾古墳館研究紀要 第2集

発行:熊本県立装飾古墳館

〒861-0561 熊本県山鹿市鹿央町岩原 3085 番地

電話:0968-36-2151

URL: http://kofunkan.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:西暦 2018 年 6 月 1 日